

# 聖域・街道・地割 IV

— 古代ローマと日本をつなぐ —

## Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre IV

Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine



BEPPU UNIVERSITY REPORT OF INTERNATIONAL JOINT RESERCH

Rédaction : IINUMA Kenji *directeur*

IISAKA Koji *rédacteur*

Publication : BEPPU UNIVERSITY  
82 Kitaishigaki 874-8501 Beppu JAPAN

Impression : CREATES co.,Ltd  
20-4 Kamegawa-higashimachi 874-0022 Beppu JAPAN

2020

2020（令和2）年度 モンペリエ第三大学出版助成および別府大学学長裁量経費事業

# 聖域・街道・地割 IV

—— 古代ローマと日本をつなぐ ——

## Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre IV

Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine

Ouvrage publié avec le concours de l'Université Paul-Valéry Montpellier 3



## まえがき

別府大学とフランス・モンペリエ第三大学（ポール・ヴァレリー大学）が1999年に交流協定を結んでから2019年で20年となりました。2001年には、古代ローマ史の研究者であるミシェル・ゲロー教授が来学され、別府大学3号館ホールで、ゲロー教授の「ローマにおける皇帝礼拝」と私、飯沼の「聖武天皇の国家構想と八幡神」の講演が行われ、活発な質疑応答がなされました。

協定当初から、双方の学生の留学交流が行われてきましたが、2006年からは交換教員の交流が始まりました。しかし、2011年の東日本大震災で留学生が帰国して以降は、一時期、学生交流は中断しました。それでも交換教員交流は続き、2015年に、交換教員として訪れたゲロー教授の弟子マルティヌ・アセナ准教授が大分県の中津条里の世界的な価値に注目し、ローマと宇佐の比較研究が始まりました。翌年には、同じくゲロー教授の弟子アントワヌ・ペレス准教授が来日し、中津市、別府大学の企画で「宇佐とローマをつなぐ」をテーマにシンポジウムが開催されました。それ以降、この4年間、「宇佐とローマをつなぐ」を大きなテーマに両大学の共同研究が進められ、双方の国で合わせて、6回の研究集会を開催し、4冊の報告書（別府大学3冊、ポール・ヴァレリー大学1冊）を発刊しました。

去年の12月21日には、両校の交流20年を記念して、この研究に中心にかかわったアントワヌ・ペレス、マルティヌ・アセナ両准教授の2人の研究者を招き、別府大学で中心にかかわった学長の飯沼、山本晴樹名誉教授を加えて、国際シンポジウム「世界遺産への道 宇佐とローマをつなぐ」を開催しました。シンポジウムのテーマは、最近行き詰まりを見せている宇佐の世界遺産登録への道について、世界の視点から新たなる道を探るものでした。

シンポジウムでは、両准教授がトルコ共和国のディヤルバクル城塞とヘヴセル公園の2015年度世界遺産登録に実際に関わられた経験を踏まえて講演され、非常に有意義なものとなりました。お二人の講演のおかげで、宇佐・国東の世界遺産登録運動にも新たなる道が見えてきたように思います。

なお、今回のシンポジウムは、別府大学単独ではなく、八幡文化の発信をめざす宇佐神宮、宇佐市教育委員会、中津市教育委員会、大分県立歴史博物館、宇佐市観光協会、宇佐神宮・国東半島を世界遺産にする会、国東半島・宇佐の文化を守る会などの協力を得て、本年2020年の宇佐放生会1300年記念行事と連動しつつ開催されました。

最後に今回、シンポジウムの成果を報告書『聖域・街道・地割』の第四集として発刊するにあたり、モンペリエ第三大学および同大人文・社会科学学際研究センター（CRIES）から出版助成を受けました。同大学長パトリック・ジリ教授および出版助成の対応に当たられたペレス准教授に感謝を申しあげたいと思います。

2020（令和2）年6月15日  
別府大学学長 飯沼 賢司

## Préface

En 2019, nous avons célébré le vingtième anniversaire de la convention d'échange qui lie l'Université de Beppu et l'Université Paul-Valéry Montpellier III. Lorsqu'en 2001, Monsieur le Professeur Michel Gayraud, chercheur en histoire romaine, est venu dans notre université, il a prononcé une conférence sur "Le culte impérial dans l'Empire romain". J'ai à mon tour évoqué "Le concept de l'État de l'Empereur Shōmu et la divinité Hachiman". Nous avons alors beaucoup discuté.

Depuis 1999, à la faveur de la convention, nous avons commencé à échanger des étudiants. Puis, à partir 2006, débuta l'échange de professeurs. Mais quand le Grand Séisme du Japon Oriental eut lieu, les étudiants français retournèrent en France. Cela provoqua une interruption momentanée des échanges étudiants. Les échanges de professeurs, cependant, se poursuivirent. En 2015 Madame le Maître de Conférences Martine Assénat, ancienne élève de M. Gayraud, vint à Beppu. Elle remarqua la valeur mondiale de Jōri de Nakatsu (Oita). Cela marqua le début des recherches comparatives entre le complexe d'Usa et l'Antiquité romaine. L'année suivante, M. le Maître de Conférences Antoine Pérez, également ancien élève de M. Gayraud, est venu au Japon. Grâce à lui s'est tenu un premier colloque sur la comparaison entre Usa et l'Antiquité romaine, lequel a été organisé par la municipalité de la ville de Nakatsu et l'Université de Beppu. Depuis lors, nous avons fait avancer nos recherches communes sur ce sujet pendant quatre ans. Nous avons tenu six communications et publié quatre bulletins (trois livraisons de l'Université de Beppu et une de l'Université Paul-Valéry).

Au 21 décembre de l'année dernière, à l'occasion de la commémoration de ces vingt ans d'échanges entre nos deux universités, nous avons organisé le colloque international « Le chemin vers le classement au patrimoine mondial ; comparaison entre Usa et l'Antiquité romaine », en invitant Mme Martine Assénat et M. Antoine Pérez, les deux acteurs principaux de ce programme de recherche. M. le Président Kenji Inuma et M. le Professeur Émérite Haruki Yamamoto ont également participé à ce colloque. Dans cette rencontre, au point de vue mondial, nous avons envisagé les modalités d'un nouveau chemin vers le classement au patrimoine universel du sanctuaire d'Usa, parce que cette question constitue, pour l'heure, un sujet complexe.

A cette occasion, nos deux collègues français ont évoqué leur expérience dans le classement au titre du Patrimoine Mondial de l'Humanité de la forteresse de Diyarbakir et des jardins de l'Hevsel en Turquie, lesquels furent inscrits sur la Liste de l'UNESCO en 2015. Grâce à eux, ce colloque a connu un grand succès et il semble que nous avons dégagé

de nouvelles perspectives pour la campagne de classement du Sanctuaire d'Usa et de la presqu'île de Kunisaki.

D'autre part, ce colloque était organisé non seulement par l'Université de Beppu mais aussi par le Sanctuaire d'Usa, lieu d'origine de la diffusion de la culture de la divinité Hachiman ; par le Comité Pédagogique de la ville d'Usa et de la ville de Nakatsu ; par le Musée Historique Départemental d'Oita ; par l'Association du tourisme d'Usa ; par l'Association pour le classement au Patrimoine Mondial de Sanctuaire d'Usa et de la péninsule de Kunisaki ; enfin, par l'Association protégeant la culture de la Péninsule de Kunisaki et d'Usa. En outre, ce colloque a participé des programmes commémorant la 1300ème année de Hôjô (un rituel religieux pour la libération des animaux) d'Usa, en 2020.

L'Université Paul-Valéry Montpellier III et le Centre de Recherches CRISES ont accordé à l'Université de Beppu une subvention pour la publication de notre bulletin "Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre IV". Nous en remercions M. le Président Patrick Gilli ainsi que M. Antoine Pérez qui a contribué à l'octroi de cette subvention.

Le 15 juin en 2020 (Reiwa, 2)  
Président de l'Université de Beppu  
Kenji IINUMA

<謝辞>

昨年 2019 年は別府大学とモンペリエ第三大学との学術交流が始まって 20 周年でした。

この間、多くの先生方にご協力いただきましたが、とりわけ別府大学側では井上富江先生、モンペリエ第三大学側ではジョジアンヌ・マス先生およびジャン=マルク・サラル先生には多大な貢献をしていただきました。これらの先生方へはこの場を借りて心からの感謝の意を表したいと思います。

2020（令和 2）年 9 月 20 日

別府大学学長 飯沼 賢司

Remerciements

L'année dernière 2019 était le vingtième anniversaire des échanges académiques entre l'Université de Beppu et l'Université de Montpellier III. Pour ces échanges beaucoup de professeurs avaient collaboré cordialement. Surtout Mme Tomie Inoue à l'Université de Beppu, Mme Josianne Mas et M. Jean-Marc Sarale à l'Université de Montpellier III, ils y'avaient bien contribué. Nous les voudrions remercier profondément.

Le 20 septembre 2020 (Reiwa, 2)  
Président de l'Université de Beppu  
Kenji IINUMA

## 目次 — TABLE DES MATIÈRES

飯沼賢司「『宇佐とローマをつなぐ』研究の軌跡と世界遺産への道」 .....	1
Kenji IINUMA, traduit par Tomie INOUE, « “Usa et Rome” Histoire des recherches et le chemin vers le patrimoine mondial » .....	5
Antoine PÉREZ, « Réflexions pour l’élaboration d’un dossier de classement Unesco de la micro-région d’Usa-Kunisaki » .....	11
アントワヌ・ペレス、廣岡恵美子訳「宇佐・国東というマイクロな地域圏のユネスコ選定資料作成のための考察」 .....	25
Antoine PÉREZ, « Résumé de ma communication pour une proposition de classement UNESCO dans la catégorie de paysage culturel » .....	31
アントワヌ・ペレス、飯坂晃治訳「『文化的景観』のカテゴリーでのユネスコ登録の提案に関する報告レジュメ」 .....	33
Martine ASSÉNAT, « Le Jôri de Nakatsu, la forteresse de Diyarbakır (Amida) et des jardins de l’Hevsel : deux paysages culturels, deux histoires, deux projets » .....	35
マルティーン・アセナ、坂井利佐子訳「中津条里およびディヤルバクル（アミダ）の城塞とヘヴセル庭園：二つの文化的景観、二つの歴史、二つのプロジェクトについて」 .....	51
山本晴樹「古代の直進性と方位——聖域の成立時期をめぐって——」 .....	61
Haruki YAMAMOTO, La rectitude de l’Antiquité et l’orientation : autour de la période formative du sanctuaire.....	67



## 「宇佐とローマをつなぐ」研究の軌跡と世界遺産への道

飯沼 賢司（別府大学学長）

### モンペリエ第三大学と別府大学の共同研究の出発点

モンペリエ第三大学（ポール・ヴァレリー大学）との交流が始まったのは1999年からで、本年度で交流20周年を迎えることになりました。1999年から本学では、井上富江教授が中心になり、文部科学省の国際研究の補助金を申請し、モンペリエ第三大学のジャン・マリ・プチ教授およびミッシェル・ゲロー教授と別府大学馬場典明教授・井上富江教授・山本晴樹教授の5名による共同研究「南フランスにおけるロマンス化、ラテン化」が開始されました。

同年10月には、当時のモンペリエ大学の学長ミシェル・ヴェイユ氏がモンペリエ側の交流担当であったジャン・マリ・プチ教授夫妻とともに来日し、別府大学において交流協定の調印が行われました。別府大学理事長西村駿一と学長中村賢二郎とモンペリエ大学学長ミシェル・ヴェイユ氏の間で調印式が行われ、国際研究集会も開催しました。

これを契機に学生の交流を始めようということになり、別府大学から史学科の修士課程の学生1名が留学しました。翌年2000年、共同研究のモンペリエ大学側のもう一人の代表ミッシェル・ゲロー教授が来学される予定でしたが、健康上の都合でアニ・フランス・ロランス教授、モンペリエ大学国際交流部長であり、責任者でもある方が来学され、「古代地中海世界」をテーマに講演をしました。彼女の努力のお蔭で双方の大学の学生が留学するための効果的な交流細目が締結され、フランスからも学生が留学できることになったのです。その翌年からは基本的に双方同数の学生が留学できることになりました。

2001年には、前年、病気で来日できなかったミッシェル・ゲロー教授が来学され、新たに国際交流基金の国際研究の補助金を申請し、国際研究「南仏と大分両地方研究」という研究プログラムが発足しました。日本側は本学の飯沼賢司教授・山本晴樹教授・井上富江教授、フランス側はモンペリエ第三大学のミッシェル・ゲロー教授の4名でした。別府大学3号館ホールで行われた研究集会では、ミッシェル・ゲロー教授の「ローマにおける皇帝礼拝」と飯沼賢司教授の「聖武天皇の国家構想と八幡神」の講演が行われ、活発な質疑応答がなされました。その講演記録は山本晴樹教授と井上富江教授の努力でフランス語訳をして本学の『史学論叢』に掲載しました。

「宇佐とローマをつなぐ」という研究は、この2001年の研究プログラム「南仏と大分両地方研究」が直接の契機であり、この時の研究集会がローマ皇帝礼拝と宇佐八幡の皇帝信仰というテーマが最初の出発点になったと思います。

### 「宇佐とローマをつなぐ」共同研究の軌跡

その後、交換教員を基軸に研究交流は続けられ、2015年にミッシェル・ゲロー教授の教え子に当たるマルティヌ・アセナ准教授が交換教員として来訪しました。このとき、大分県の



中津条里を訪れ、その世界的な価値に注目し、ローマと宇佐の比較研究が始まりました。翌年には、同じくゲロー教授の弟子アントワヌ・ペレス准教授が来日し、中津市、別府大学の企画で「宇佐とローマをつなぐ」をテーマにシンポジウムが開催されました。それ以降、この4年間、「聖域・街道・地割—宇佐とローマをつなぐ」をテーマに両大学の共同研究が進められ、双方の国で合わせて、6回の研究集会を開催し、4冊の報告書（別府大学3冊、ポールヴァレリー大学1冊）を発刊しました。今回のシンポジウムは、この研究の軌跡を整理し、世界遺産への道を探ることが課題となっています。

それでは、私の報告では、「宇佐とローマをつなぐ」の研究の軌跡を整理、その課題を論じたいと思います。研究の直接的出発点は、2015年9月における中津市・別府大学共催の国際シンポジウム「条里と道と祭祀—古代ローマと日本をむすぶ—」です。ここで、アントワヌ・ペレス准教授は、古代ローマの地割制度、ケントゥーリア地割（方格地割）と道路との関係について講演し、日本の条里や古代官道との類似性を指摘しました。さらに、この地割がローマ皇帝の支配権と結びつき、ローマ属州の拠点都市の構造と連動し、皇帝礼拝の祭祀空間とも密接に関係していたことも明らかにしました。

これを受けて、歴史地理学者の長崎外国語大学の木本雅康教授の報告が行われ、日本の古代においても、道路や条里制は、ローマのケントゥーリア地割との共通点があることが明らかにされました。最後に、研究代表者の飯沼が「宇佐八幡宮の登場と官道・条里—洛陽周辺の地割と龍門の事例と比較して—」という報告を行い、日本の条里制のもととなった中国の方格地割と祭祀との関係、宇佐へ向かう官道の整備と宇佐神宮の出現・発展の関係について報告しました。

ローマのケントゥーリア地割（方格地割）と道路と皇帝礼拝という政治と宗教を組み合わせる研究視点は、日本の古代官道研究の専門家である木本氏や古代史・宗教史を研究している飯沼にとっても日本における研究の新展開の方向を示すものでした。このシンポジウムの報告書は翌年10月『聖域・街道・地割—古代ローマと日本をむすぶ—』と題して別府大学から日本語・フランス語併記で刊行されました。

その後、フランス側ではアントワヌ・ペレス准教授が2016年3月モンペリエ第三大学において「中津条里—ある特異な文化的景観—」と題するシンポジウムを開催し、別府大学の飯沼賢司教授が「八幡神の登場と官道・条里」、山本晴樹教授（古代ローマ史）が「地割と街道と聖域」と題する報告を行いました。さらに2017年3月再びアントワヌ・ペレス准教授は同大学で「中津条里 II」のシンポジウムを開催し、本学の飯沼教授と段上達夫教授（日本民俗学）が参加しました。

アントワヌ・ペレス准教授が「中津条里とローマ地割—比較研究への関心」という報告を行い、これまでの研究を整理し、飯沼賢司が「条里地割と祭祀に関する歴史的考察—大分県を中心に」、段上達雄が「神社祭礼と灌漑—大分県の事例から—」を報告し、その後、アントワヌ・ペレス、ジャン＝マルク・サラル氏の代読で、山本晴樹の「聖域・街道・地割—宇佐（日本）とナルボ（フランス）の場合—」が報告されました。次いで、マルティヌ・アセナ准教授が「ガリア・ナルボネンシスの地割はどのようにして発生するのか」という報告を行い、最後にジャン＝ピエール・ラファジィ・アンドリアミハイゴ（ペレス代読報告）「日



本法制における条里と慣習法」の報告がありました。フランス側、日本側の報告では、条里地割の現在までの継続が問題となり、水利、祭祀の関係が明らかにされました。このシンポジウムについては2017年3月に日仏両語併記の報告書が刊行されました。

2016年3月、モンペリエ第三大学において学長（当時は副学長、現学長）パトリック・ジリ氏の立ち合いのもと両大学が本研究のテーマを進展させる共同研究を行うことを確認しました。また、2017年3月には、本学の学長佐藤瑠威がモンペリエ第三大学を訪問し、共同研究の進展を新学長ジリ氏と確認し、同年8月末にジリ学長が本学に来学され、このことをさらに再確認することになりました。

それを受けて同年10月27日にアントワヌ・ペレス准教授、マルティーン・アセナ准教授が参加する本研究に関するシンポジウムを本学で開催することになりました。そこでは、アントワヌ・ペレス准教授が「地割・街道・聖域—ナルボヌを中心に」、アセナ准教授が「地割・街道・聖域—ニームを中心に」という報告を行い、最後に、モンペリエ第三大学エリザベート・アストリュック博士が「勅使街道の寺社建築—東西比較史の観点から」という報告を行いました。

2018年は、10月9日に、モンペリエ第三大学サン・シャルル講堂においてシンポジウム「中津条里（III） 聖域・街道・地割」が開催され、飯沼教授、小柳和宏氏（大分県立歴史博物館）が参加しました。報告としては、アントワヌ・ペレス（モンペリエ第三大学・准教授）「アウグストゥスのごとき天皇？—奈良時代（8世紀）における天皇権力の聖域と本質」、飯沼賢司（別府大学教授・文学部長・日本中世史）「国境の祭祀と官道と条里—宇佐とオランジュの比較を通して」、小柳和宏（大分県立歴史博物館館長）「発掘成果にみる古道と条里」、山本晴樹（別府大学名誉教授・西洋古代史）「古代ローマと奈良時代日本との比較—ナルボヌの属州聖域と宇佐条里の場合」（代理報告）、エリザベート・アストリュック（モンペリエ第三大学・美術史）「中津・宇佐における勅使街道周辺の寺社、条里の永続的要素」などでした。

2019年4月には、アントワヌ・ペレス氏とマルティーン・アセナ氏が調査のため、別府大学を訪れ、宇佐で調査を行いました。4月末～5月はじめには、学長に就任した飯沼がモンペリエを訪れ、交流を深めるとともにニームの水源ユール泉（ユゼス）の調査を行いました。「宇佐とローマをつなぐ」共同研究は、この4年間の間に着実に進んでいます。

### 「宇佐とローマをつなぐ」共同研究の成果と世界遺産

ローマ期南フランス（古代名ナルボネンシス）と九州北部は、それぞれローマと大和からみて外境地帯（まつろわぬ民の住む地域）として位置づけられ、古代国家の支配の最前線となった点において共通性を有しています。そこには古代国家の支配の論理が具現化された施設やシステムがみられます。ナルボネンシスにおいては、植民市建設の際、植民者への土地配分のための地割（ケントゥーリア地割、方格地割）が行われましたが、その基準線の方位は時の権力者によって決定されました。従って権力者の交代が生じる場合、地割の基準線の引き直しが行われることになります。当研究のフランス側代表者であるアントワヌ・ペレス氏（モンペリエ第三大学准教授）によれば（1995年の著書）、同地域の首都ナルボ（現ナルボ

ンヌ)では少なくとも4回にわたって地割の引き直しが生じ、その最後の引き直しはローマ皇帝(定説ではウェスパシアヌス帝、後1世紀後半)によって行われ、それはまたナルボンヌ郊外にあった属州皇帝礼拝聖域の方位をも決定したことを明らかにしています。

これに対して、古代の東九州(豊前国)の宇佐八幡宮境内において、日本の神仏習合の開始となる神宮寺(弥勒寺)の建立はあきらかにその方位が宇佐八幡宮の参道ともいえる宇佐大路および西参道の方位によって決定されていました。そして西参道から宇佐大路の直線を延長すると大分県中津市郊外に現存する沖代条里(後8世紀)の南限線(現県道663号線)に行き当たります。これは当研究の日本側代表者飯沼賢司(別府大学学長)がすでに1991年に指摘していたことです(『宇佐大路』大分県教育委員会)。すなわち日本においても聖域の方位と地割・官道の方位が一致する現象が生じているわけです。

八幡神は、官道の整備とともに、大和国家の西の果てに出現し、軍神・国境守護神として整備され、やがて、国家の守護神、大仏守護神として中央に進出しました。その後、8世紀後半には、天皇霊と結合し、八幡神(八幡大菩薩)は皇室の祖神である伊勢の宗廟とともに国家最高神となったわけです。これはローマの皇帝の神霊(アウグストゥスの神霊)への礼拝と共通する側面をもっています。国家の建設する官道、地割、祭祀施設(聖域)は、密接な関係をもって成立し、その宗教施設における祭祀が国家支配の上で重要な役割をもったことは明らかです。

「聖域」「街道」「地割」というキーワードで行われた「宇佐とローマ」をつなぐ研究は、宇佐地域、宇佐神宮がローマの遺跡とならぶ世界的な、普遍的な価値を有することを明らかにしてきました。その過程で、宇佐の文化、信仰、その周辺遺跡は、世界遺産であるローマの遺跡とも比較できる人類の共有の文化遺産としての価値をもつと確信するようになりました。今日の国際シンポジウムでは、その点を掘り下げてみたいと考えています。

## “Usa et Rome”

### Histoire des recherches et le chemin vers le patrimoine mondial

Kenji IINUMA (président de l'Université de Beppu)

Traduit par Tomie INOUE (l'Université de Beppu)

#### Le début des recherches en collaboration entre les deux universités ; Université de Montpellier III (Université Paul Valéry, France) et l'Université de Beppu (Japon)

Notre université et l'Université de Montpellier III (Université Paul Valéry) collaborent depuis 1999 et nous fêtons le 20<sup>e</sup> anniversaire de nos échanges qui ont commencé par le projet de recherches intitulé “Latinisation et Romanisation dans le Midi en France.” Ces recherches, subventionnées par la Ministère de l'Éducation Nationale du Japon et dont la candidature, soumise à l'initiative de Mme Tomie INOUE, professeur à notre université, étaient effectuées en équipe de 5 chercheurs japonais et français ; T. INOUE, Haruki YAMAMOTO, Noriaki BABA ainsi que Jean-Marie PETIT et Michel GAYRAUD, professeurs à l'Université de Montpellier III.

En octobre 1999, présidente de l'Université de Montpellier III, Mme Michel WEIL s'est rendue à notre université accompagné du responsable des échanges interuniversitaires, M. Jean-Marie PETIT et son épouse, Mme PETIT, pour la signature de la Convention pour les Échanges de nos deux universités. La convention a été signée par le président de notre université, M. Kenjirô NAKAMURA et M. Shunichi NISHIMURA, président du Conseil d'Administration de l'Université de Beppu d'un côté et de l'autre, la présidente de l'Université de Montpellier III, Mme Michel WEIL. Après la cérémonie de cette convention, un colloque international a eu lieu dans la salle de conférence du bâtiment III.

Dans le cadre de cette convention des échanges, le programme d'échanges des étudiants a démarré par l'envoi d'un étudiant en maîtrise en histoire de notre université. L'année suivante, M. Michel GAYRAUD, un autre collaborateur à l'Université de Montpellier III, devait venir à Beppu. Mais en raison de la santé, ce projet n'a pas malheureusement pas été réalisé. Et Mme Annie-France LAURENCE, professeur, directrice et responsable de la section des échanges internationaux à l'Université de

Montpellier III, est venue faire sa conférence intitulée “Le Monde de la Méditerranée antique” à la place de M. GAYRAUD. C’était grâce aux efforts de Mme LAURENCE que nous pouvions continuer des échanges effectifs des étudiants ainsi que des professeurs entre deux universités. D’autres articles plus détaillés ont été ajoutés pour nous permettre d’envoyer le même nombre d’étudiants de nos deux universités réciproquement.

En 2001, M. Michel GAYRAUD, professeur à l’Université de Montpellier III, est venu au Japon grâce à l’aide de subvention de la Fondation du Japon pour des études internationales. Les participants à ces échanges sont le coté japonais. Haruki YAMAMOTO, Tomie INOUE, Kenji IINUMA, professeurs à l’Université de Beppu (au Japon) et du côté français, Michel GAYRAUD, professeur à l’Université de Montpellier III (en France), intitulé “Étude sur les deux régions, Oita au Japon et le Midi en France.” Lors du colloque qui a eu lieu dans la salle de conférence du bâtiment III à l’Université de Beppu, Michel GAYRAUD a donné une conférence “Culte impérial en Gaule Romaine Méridionale” et M. Kenji IINUMA “Le concept de l’État de l’empereur Shômu et la divinité Hachiman.” Ces deux conférences ont été enregistrées dans le bulletin du département de l’histoire de notre université en collaboration avec Haruki YAMAMOTO et Tomie INOUE.

Le projet de recherches “Usa et Rome” remonte au programme de recherches de 2001 intitulé, “Études sur deux régions, Oita au Japon et le Midi en France” avec le thème “Le Culte Imperial de Gaule Romaine Méridionale en France et la Divinité Hachiman à Usa au Japon.”

### **“Usa et Rome” — l’histoire des recherches en collaboration —**

Ces échanges ont continué et en 2015, Mme Martine ASSÉNAT, maître conférence à l’Université de Montpellier III, et également ancienne élève de M. GAYRAUD, est venue à Beppu comme professeur d’échanges. En profitant de son séjour, elle a visité le Jôri de Nakatsu. En faisant des recherches, elle a noté que ce Jôri de Nakatsu méritait la reconnaissance d’une valeur mondiale. C’était le commencement de nos études comparatives intitulées “Usa et Rome.” L’année suivante M. Antoine PÉREZ, maître conférence à l’Université de Montpellier III, et également ancien élève de M. GAYRAUD, est venu à Beppu et un symposium intitulé “Usa et Rome” a été organisé par l’initiative de l’Université de Beppu et la ville de Nakatsu. Pendant 4 ans après ce symposium, les recherches conjointes de nos deux universités ont été poursuivies sur le même thème. Nous avons organisé dans nos deux pays, six colloques et publié quatre rapports scientifiques dont trois par l’Université de Beppu et un par l’Université de Montpellier III.

Dans le présent rapport, je me permets d'abord de retracer l'acheminement de projet recherches sur "Usa et Rome" puis réfléchir sur les problèmes qui restent à résoudre. C'est dans ce contexte présenté plus haut que nos recherches "Usa et Rome" a démarré mais son origine remonte à un autre symposium intitulé "Le Jôri, la Voie et le Sanctuaire — entre le Japon et l'Antiquité Romaine" en septembre 2015, co-organisé par la ville de Nakatsu et par notre université. Dans ce symposium, Antoine PÉREZ a fait une présentation sur la relation entre la Limitation romaine et la Centuriation romaine, et la Voie dans laquelle il a souligné l'existence d'une similitude entre le Jôri et la route officielle (Kando) dans l'Antiquité japonaise. PÉREZ a mis en évidence le fait que ce système de cadastre était lié au pouvoir de l'empereur romain et les villes principaux de la Province romaine et à l'espace du culte impériale.

Ensuite Masayasu KIMOTO, professeur à l'Université des Langues étrangères de Nagasaki et spécialiste de l'histoire-géographie, a confirmé l'existence de points communs. D'une part le système de Jôri des routes au Japon dans le temps ancien, et d'autre part le système du Cadastre romain et le Centuriation dans l'Antiquité romaine. À la fin du symposium, IINUMA responsable et représentant du projet de recherches a fait sa communication intitulée "L'Apparition de la Divinité Hachiman dans la documentation, la Voie et le Jôri. Il s'agit d'une comparaison du Cadastre et du Cas de Ryûmon" où il a éclairci la relation entre la limitatio en Chine et les fêtes religieuses qui a servi de base pour le Jôri du Japon et de l'autre le rapport entre l'aménagement de la grande route qui va vers Usa et la construction du temple Usa et son développement.

Cette approche qui associe la politique et la religion – à savoir le Cadastre de Centuria de la période romain et le culte de l'empereur, a permis à Kimoto, spécialiste de l'histoire de l'antiquité et de la région, de voir une nouvelle orientation des recherches de ce domaine au Japon. Les communications du symposium en question intitulé "Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre" ont été publiées en octobre

Plus tard M. PÉREZ a réalisé cette fois-ci en France à l'Université de Montpellier III, un symposium intitulé "Le Jôri de Nakatsu — un paysage culturel et spécial." Et Haruki YAMAMOTO (professeur de l'histoire) et Kenji IINUMA ont fait leurs présentations. Dans sa présentation "L'Apparition du Divinité Hachiman dans les documents, la Voie et le Jôri," IINUMA a apporté des précisions sur la relation entre la Limitatio en Chine et les fêtes religieuses. En mars 2017, Antoine PÉREZ, maître conférence à l'Université de Montpellier III, a fait sa présentation sur "le Jôri de Nakatsu II ; l'intérêt d'une étude comparatiste." Et Tatsuo DANJÔ et Kenji IINUMA, professeurs à l'Université de Beppu, ont fait également leurs présentations.

Antoine PÉREZ a fait sa présentation “Le Jôri de Nakatsu et la Limitatio romaine : l’intérêt d’une étude comparatiste” où il a fait la synthèse de ses recherches antérieures. Et moi-même, IINUMA, j’ai fait ma présentation, “Réflexion historique sur le terrain issu du système Jôri ; son irrigation et les fêtes religieuses dans le département d’Oita.” Et suivi par la présentation de Tatsuo DANJÔ “Les fêtes dans les sanctuaires dédiés à l’irrigation ; le cas du département d’Oita.” Après ces deux présentations, Antoine PÉREZ et Haruki YAMAMOTO (M. SARALE a lu à sa place) ont continué, “Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre ; les Cas de Usa (Japon) et de Narbonne (France).” Martine ASSÉNAT, maître conférence à l’Université de Montpellier III, a fait sa présentation “Comment naissent les Centuriation en Gaule Narbonensis ?” À la fin, Jean-Pierre Razafy-ANDRIAMIHAINGO a présenté son rapport (M. PÉREZ a lu à sa place) “Sur le rôle du Jôri et Guiri dans le système juridique et judiciaire japonais.” À travers les présentations du symposium, les systèmes japonais et français ont été comparés et bien des idées ont été échangées sur ce thème. Il y a eu des discussions sur le Jôri et le Cadastre de l’antiquité jusqu’à nos jours et la relation entre l’irrigation et les fêtes religieuses a bien été éclairci. Le rapport sur les symposiums a été publié en mars 2017, en japonais et en français.

La décision de la poursuite de recherches en collaboration entre les deux universités a été prise en mars 2016 à l’Université de Montpellier III, sous la présence de M. Patrick GILLI, président de l’Université de Montpellier III (vice-président à l’époque). Ensuite en mars 2017, M. Rui SATÔ, qui était le président de l’Université de Beppu à cette date, s’est rendu à l’Université de Montpellier III pour déterminer le développement de ces recherches entre deux universités.

Le 27 octobre en 2017, un autre symposium a été organisé à Beppu. M. Antoine PÉREZ, maître conférence à l’Université de Montpellier III, a d’abord fait sa présentation “Le Cadastre, la Voie, le Sanctuaire- autour de Narbonne.” Ensuite Martine ASSÉNAT, maître conférence à l’Université de Montpellier III, a fait sa présentation “Le Cadastre, la Voie et le Sanctuaire — autour de Nîmes.” Enfin, Elizabeth ASTURUC, assistante pour des recherches, a fait sa présentation “Les temples le long de la Voie impériale de Nakatsu à Usa au point de vue l’histoire comparative entre l’est et l’ouest.”

L’année suivante en octobre 2018, dans la salle de conférence, “Saint Charles” à l’Université de Montpellier III, a été organisé le symposium intitulé “Le Jôri de Nakatsu (III) ; le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre.” Les participants ont fait leur présentation dans l’ordre suivant : premièrement Kenji IINUMA, professeur et président de notre université et Kazuhiro KOYANAGUI, directeur du musée départemental d’histoire, ont fait chacun leurs présentations. Antoine PÉREZ, “L’Empereur comme Augustus ? — Le Sanctuaire du pouvoir d’empereur et son essence à l’Époque Nara au Japon, (8<sup>e</sup> siècle).” Kenji IINUMA,



professeur et le doyen à l'époque, spécialiste d'histoire médiévale japonaise, "Les Fêtes religieuses à la frontière de l'État, le Kandô et le Jôri." Kazuhiro KOYANAGUI a suivi sa présentation intitulée "Sur la relation entre la route ancienne et le Jôri d'après des résultats des fouilles de Usa." Haruki YAMAMOTO, professeur émérite à l'Université de Beppu, historien, a présenté "Le sanctuaire provincial de Narbonne et le jôri d'Usa" (M. SARALE a lu à sa place). A la fin Elisabeth ASTURUC, assistante des recherches à l'Université de Montpellier III, a fait sa présentation intitulée "Les temples le long de la Voie impériale de Nakatsu et à Usa, éléments de pérennisation du Jôri."

En avril 2019 M. Antoine PÉREZ et Mme Martine ASSÉNAT sont venus à l'Université de Beppu et ils ont fait des recherches à Usa. De fin-avril jusqu'au début de mai, M. IINUMA, président à l'Université de Beppu, a visité l'Université de Montpellier III et en faisant des échanges, il est allé faire des recherches à la source Eure à Nîmes, précisément à Uzès. Ainsi nos recherches "Usa et Rome" entre les deux universités, se sont constamment développés.

## "Usa et Rome"

### — Résultats de nos études comparatives et le patrimoine mondial —

Le Midi en France de côté Rome (Narbonensis, ancien nom) et la région du Nord du Kyûshû (régions des gens désobéissants) sont des régions frontières respectivement de Rome et de Yamato et ont des caractéristiques communes d'être soumise au contrôle de leur État. S'y trouvent des équipements et système qui reflètent la logique de l'administration de pouvoir de l'époque. À Narbonensis (le Centuria) par exemple lors de la construction de la nouvelle cité, plantée sur le territoire colonisé, la division des terrains a été effectuée selon l'axe principal dont l'orientation géographique dépendait au choix du pouvoir. Ce qui entraîne, à chaque changement du pouvoir, l'adaptation d'un nouvel axe pour la division des terrains. D'après M. Antoine PÉREZ, représentant de côté français (rédacteur des rapports de nos études en 1995), la capital Narbo, Narbonne actuel, a connu 4 changements d'axe principal de la division des terrains, dont le dernier date de l'empire romain (selon la théorie communément admis, Vespasianus, à la seconde moitié du 1<sup>er</sup> siècle après J. C.) il confirme également que le même axe a été appliqué à la détermination de l'orientation du Sanctuaire pour le culte impérial de Narbonensis dans la banlieue de Narbonne.

En revanche, à l'ancienne province de l'Est-Kyûshu (État de Buzen), La détermination de l'orientation pour la construction du temple Shingûji (Mirokuji), premier

temple qui marque le syncrétisme du shintoïsme et de bouddhisme du Japon, a été déterminée selon l'orientation des allées d'accès ; la Voie d'Usa et l'allée-ouest qui sont des allées d'accès de Usa-Hachimangû (Temple Usa-Hachiman). Sur la prolongation de la ligne qui relie l'allée-l'accès Ouest et la Voie d'Usa, se trouve la limite Sud (route départementale 663 actuel) de Jôri d'Okidai actuel (seconde moitié de 8<sup>e</sup> siècle) qui existe jusqu'à nos jours dans la banlieue de Nakatsu du département d'Oita. M. IINUMA, président de l'Université de Beppu et représentant du coté Japonais de l'équipe de la recherche en question, confirmait en 1991, une remarque qui témoigne une convergence de l'orientation géographique des espaces sacrés et des celle de la structure territoriale et des chemins ("La Voie d'Usa" publiée par le comité de l'Éducation départemental d'Oita).

La croyance de la Divinité Hachiman a apparue à l'extrémité Ouest de l'État Yamato avec l'aménagement des routes principales. Bientôt elle s'est développée pour arriver jusqu'au centre d'État comme dieu de la guerre, en tant que dieu du protecteur de l'État, Grand Bouddha protecteur. Et dans la seconde moitié du 8<sup>e</sup> siècle, en liant avec les âmes des empereurs successifs, la divinité Hachiman s'est située comme dieu le plus puissant avec le bâtiment pour célébrer les ancêtres de la famille impériale à Isé. Ce phénomène a des points communs avec le culte impérial vis-à-vis de l'empereur romain, divinisé, Augustus. Les routes officielles, la division des terrains ainsi que les établissements sacrés (espaces sacrés), le Cadastre et le Sanctuaire étaient construits par l'État avec des rapports étroits réciproques et il est donc évident que les fêtes célébrées dans ces lieux sacrés avaient des rôles importants pour la gouvernance de l'État.

Nos recherches "Usa et Rome" effectuées avec les mots-clefs "Sanctuaires" "Voie" "Cadastre" nous ont permis de vérifier que la région de Usa a une valeur universelle, comparable aux vestiges de Rome antique. Nous souhaitons approfondir cet aspect dans le symposium d'aujourd'hui.



# Réflexions pour l'élaboration d'un dossier de classement Unesco de la micro-région d'Usa-Kunisaki

Antoine PÉREZ (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

## - Introduction

Je voudrais vous montrer en quoi le dossier d'inscription au Patrimoine Mondial de l'UNESCO de l'ensemble régional Usa-Kunisaki pourrait s'inspirer de l'exemple du classement, en 2015, de la Forteresse et des Jardins de Diyarbakir, l'antique Amida, au titre de **Paysage Culturel**.

Le classement Unesco de Diyarbakir – Amida (juillet 2015) s'intitule : **Paysage culturel de la forteresse de Diyarbakir et des jardins de l'Hevsel**

Il s'est donc appliqué à deux objets : (doc 1, 2, 3)

1) - d'une part ses murailles exceptionnelles qui témoignent de l'antiquité de la ville et de son histoire, d'un savoir-faire technique et architectural caractéristique de la civilisation romaine de l'Antiquité tardive, mais aussi des civilisations postérieures qui ont occupé la ville (docs 4, 5, 6)

(critère Unesco = « *offrir un exemple éminent d'un type de construction ou d'ensemble architectural ou technologique ou de paysage illustrant une ou des périodes significative(s) de l'histoire humaine* »)

2) - d'autre part, les jardins de l'Hevsel, topographiquement liés à la muraille, véritable biotope secondaire qui ont été entretenus jusqu'à aujourd'hui et constituent un patrimoine économique et culturel original et exceptionnel, encore vivant et fonctionnel aujourd'hui (doc. 7).

(critère Unesco = « *le paysage essentiellement évolutif.* » « *Un paysage vivant est un paysage qui conserve un rôle social actif dans la société contemporaine étroitement associé au mode de vie traditionnel et dans lequel le processus évolutif continue. En même temps, il montre des preuves manifestes de son évolution au cours des temps.* »)

Or, on retrouve ces deux mêmes éléments, répondant aux deux mêmes critères de l'Unesco, dans notre région de Nakatsu-Usa-Kunisaki : le tryptique Buzen-Kando – Jôri – sanctuaire d'Hachiman, d'une part, et le Jôri lui-même, d'autre part.

C'est pourquoi il nous paraît que l'on pourrait utiliser un protocole argumentaire comparable pour envisager le classement de la micro-région d'Usa-Kunisaki.

## A) La muraille de Diyarbakir – Amida

Commençons par examiner le cas de la ville de Diyarbakir...

Le classement du rempart a été motivé par sa valeur architecturale intrinsèque, mais aussi par le fait qu'il renferme, dès l'Antiquité, une ville pluri-séculaire.

Je ne m'attarderai pas sur les caractéristiques techniques, ou architecturales du monument, mais sur la ville qu'il définit et désigne.

Le rempart d'Amida fut essentiellement constitué, dans sa partie visible actuelle, en 337-349 ap. J.-C. par l'Empereur Constance II (Doc. 8) Un texte célèbre d'Ammien Marcellin nous le dit (Doc. 9). Ce rempart fut restauré dès l'Antiquité par les Romains, par les empereurs byzantins (Justinien, par exemple, au milieu du VI<sup>e</sup> siècle), puis par les Arabes, qui l'ornèrent d'inscriptions ornementales remarquables aux X-XI<sup>e</sup> siècles (écriture Coufique- Doc. 10). Enfin, les Ottomans continuèrent de restaurer et d'entretenir la muraille, ce qui valut à la ville le nom de Kara Amid, « Amid la Noire », du fait de la couleur sombre de la roche basaltique qui fut utilisée. Ce nom fut même connu en Europe sous la graphie altérée de « Caramit », dans les textes vénitiens (de Venise) médiévaux...

C'est dire que Diyarbakir fut toujours, partout dans le monde, associée à son rempart : il est donc naturel que ce soit ce monument qui ait attiré l'attention des Inspecteurs de l'UNESCO.

Mais ce rempart désigne une ville, **une histoire très particulière** : et c'est ce qui a aussi attiré l'attention de l'UNESCO

En effet, en tant que forteresse terminale de l'Empire romain, à la frontière extrême avec les Perses, **elle synthétise à elle seule toutes les caractéristiques de la romanité**. (c'est exactement la même configuration pour la région d'Usa, qui fut un terminus de l'État du Yamato, face aux barbares de Kyûshû..).

Mais, en même temps, elle a traversé les siècles et les civilisations, ce qui lui donne une portée universelle, en intégrant au fil du temps des apports nombreux qui n'ont jamais remis en cause son intégrité...

Nous avons Martine et moi-même, participé à la constitution du dossier historique, spécialement pour ce qui concerne l'Antiquité romaine, qui vit naître la citadelle de Diyarbakir. Nous avons mis en évidence les éléments suivants :

- Le rempart de Diyarbakir circonscrit une ville millénaire.

- **Deux cités romaines, d'époques différentes...**

Le rempart renferme une cité dont l'organisation topographique est typique d'une ville romaine. Autour de l'arc tétrapyle (Doc 11), sont distribués quatre axes qui déterminent deux villes de chronologie différente. L'une, la ville rouge (Doc 12) est probablement la cité de Constance II, qui correspond au texte d'Ammien Marcellin, l'autre, la ville verte, est probablement antérieure. En effet, son orientation diffère, et, comme on le voit sur la figure (doc 13), elle est représentée par la colonnade ouest de la cour de l'actuelle grande mosquée, dont le décor architectural est indiscutablement d'époque et d'inspiration sévérienne (première moitié du III<sup>e</sup> siècle de notre ère) (Doc 14). Cette ville verte reflète donc une autre époque, bien antérieure à celle du bas-Empire, **ce qui inscrit la cité d'Amida dans la longue durée antique**. A cette période du haut-Empire peut être également rattachée la découverte d'un théâtre classique (doc 15). Ce monument ne peut être daté que du haut-Empire, et il montre en outre qu'Amida est déjà au III<sup>e</sup> siècle une cité importante : l'édifice théâtral peut être en effet classé au deuxième rang, en taille, des théâtres de l'Orient romain, après le théâtre d'Apamée (Syrie).

Mais Amida est probablement encore plus ancienne :

... une *polis* hellénistique (II<sup>e</sup> siècle avant J.-C.)

On peut encore remonter la chronologie de la cité à l'époque hellénistique, c'est-à-dire au III<sup>e</sup> siècle avant notre ère. La cité a été vraisemblablement fondée comme ville royale, sous le nom d'*Epiphaneia kata Tygre* par le roi séleucide Antiochos IV Epiphane, en 164-163 avant J.-C., comme l'indique un manuscrit syriaque (rédigé dans la langue des chrétiens d'Orient).

...et une capitale provinciale de l'Empire Assyrien (IX<sup>e</sup>-VIII<sup>e</sup> s. av. J.-C.)

Mais la ville existait bien avant, dans la lointaine protohistoire, au IX<sup>e</sup> siècle av. J.-C.

On voit qu'ici, une cité du nom d'Amedi fut assiégée par le roi néo-Assyrien Assurnasirpal 2, en 866 av. J.-C. Ses jardins furent détruits (doc. 16)

Cela signifie que : a) la ville existait déjà au début de l'âge du Fer sous ce même nom Amedi, plus tard latinisé en Amida ; b) Qu'elle était déjà pourvue d'un rempart et de jardins dès cette époque, même s'il est probable qu'il ne s'agit à cette époque lointaine ni des remparts du bas-Empire romain, ni des jardins de l'Hevsel. On voit ici où se trouvait la ville de l'âge du bronze. (Doc. 7)

Après la chute de la ville, cette dernière devient jusqu'en 705 avant J.-C. une **capitale provinciale de l'empire néo-assyrien**. Elle disparaît ensuite des textes pour ne réapparaître que un millénaire plus tard, sous la plume d'Ammien Marcellin, comme on vient de le voir.

Notre travail, Martine et moi-même, a donc consisté à combler le hiatus historique et chronologique qui séparait jusqu'alors l'époque assyrienne du bas-empire romain : Amida a traversé toute la période antique, depuis la protohistoire jusqu'à la fin de l'Antiquité romaine, à l'abri de ses remparts.

Nos travaux ont été versés au dossier de Classement de l'Unesco pour rendre plus substantielle la partie historique et combler, en quelque sorte, le vide monumental qui caractérise l'intérieur des murailles d'Amida.

Mais, comme on l'a dit l'histoire des remparts et de la ville ne se sont pas arrêtés à l'époque romaine, fut-elle tardive. En effet, Amida a été tenue longtemps par les Perses, puis est redevenue l'une des villes majeures de l'Orient byzantin ; elle fut conquise par les Arabes en 639 ap. J.-C. Puis une dynastie Kurde, puis les Turcs ont successivement investi la cité, qui a donc traversé les époques et les civilisations jusqu'à nos jours, comme nous le voyons sur le document ci-après (Doc. 17)

Durant toutes ces dominations successives, le rempart ne fut jamais détruit, mais au contraire toujours utilisé, réaffecté, décoré et agrandi. Il représente bien un « *paysage illustrant une ou des périodes significative(s) de l'histoire humaine* ».

## **B) La province antique de Buzen : Usa-Kunisaki**

La comparaison s'impose avec notre système paysager d'Usa-Kunisaki.

Pourquoi ? – parce que nous avons là aussi un objet monumental ou, en

l'occurrence paysager, qui témoigne d'une époque classique de l'histoire humaine (le siècle de Nara), mais qui continua d'exister par la suite jusqu'à nos jours, au-delà des grandes mutations historiques, politiques et socio-économiques.

Qu'avons-nous ?

- Le tryptique Voie Impériale - Cadastre (Jôri) - Sanctuaire d'Usa (Doc 18) : il constitue l'expression topographique, visible et unique en son genre, de la période historique de Nara, c'est-à-dire une illustration de l'application territoriale par l'État du Yamato du régime des Codes (le ritsu-ryō) : à la fois au plan politique et administratif (la Voie), au plan économique (le Jôri) et au plan religieux (le Sanctuaire d'Hachiman) (doc. 19). Ce paysage cohérent du point de vue chronologique et historique, est **parfaitement perceptible dans la micro-région d'Usa-Kunisaki** (la province antique de Buzen) pour peu qu'on trouve la bonne manière de le **mettre en scène**.

Il faut insister sur cette cohérence, notamment en mettant l'accent sur le lien organique unissant la topographie sacrée à la définition même du régime impérial antique de Nara. C'est pourquoi il faut montrer que le **Buzen-kando** est le cœur d'une **unité topographique** qui réunit le Jôri de Nakatsu au miroku-ji du complexe d'Usa dans la deuxième moitié du VIII<sup>e</sup> siècle, après la construction du second Sanctuaire, à l'époque où l'Etat japonais a fini d'unifier les territoires de Kyûshû (Doc. 20).

Il faut convaincre l'Unesco que notre micro-région, terminus du premier grand État de Yamato, est, plus que toute autre région japonaise, comme une vitrine du Japon ancien, le **symétrique** du Kansai, autour de Nara. Hachiman, divinité des guerriers de la conquête, est la divinité tutélaire du peuple Japonais tout entier et le protecteur divin du Todai-ji : il se trouve que son sanctuaire principal, le plus ancien, est ici, à Usa, et **toute l'organisation topographique qui lui est associée est comme une écriture, un acte de naissance de l'État nippon classique**.

Cette topographie exprime à la fois le nouveau syncrétisme religieux shinto-bouddhiste en même temps que la position du dirigeant, le tenno de Nara. Peut-être faudrait-il par exemple expliquer aux délégués de l'UNESCO comment la marche symbolique quinquennale du Légat Impérial à Usa, cérémonie éminente, a un lien évident, même si, bien sûr, elle est née dans des circonstances historiques différentes, avec l'entrée rituelle du mikoshi la prêtresse d'Hachiman au Todai-ji de Nara, en 749 ap. J.-C., à la fin du règne de l'Empereur Shômu, lorsque ce dernier posa les bases de la nouvelle doctrine religieuse (doc. 21 ; 22).

Mais ce paysage n'a pas cessé d'évoluer avec la fin du régime de Nara, au VIII<sup>e</sup>

siècle. **Bien au contraire** : les parcellaires jôri ont continué de s'agrandir et de se développer, mais dans un nouveau contexte socio-politique : celle du régime des shoen et de l'appropriation de l'espace par les seigneurs du Moyen-Âge et les grands domaines des temples bouddhistes, comme l'a montré par exemple le Professeur Iinuma.

De même, La Voie Impériale - certes gauchie et parfois modifiée dans tel tracé particulier de son parcours - a continué, jusqu'à aujourd'hui, à rallier le grand sanctuaire d'Usa, et le sanctuaire lui-même a fait l'objet de bien des adjonctions jusqu'à l'époque d'Edo et l'époque contemporaine. Là encore, **comme on l'a vu à Amida-Diyarbakir**, notre monument paysager constitue le **conservatoire d'une époque**, mais s'est adapté à de nouveaux contextes historiques et politiques, **sans que son intégrité ait jamais été véritablement menacée**.

J'illustrerai ce point par cette carte établie par Monsieur Koyanagi, des abords du Sanctuaire d'Usa (Doc. 23) : on y voit tout-à la fois, dans un espace réduit, Kyosyu Duka ( la « tombe du barbare Hayato »), témoignage du Kyûshû proto-historique ; on y voit également, non loin de là, des kofun de la période Yamato antérieure à la construction de l'État classique ; On y voit la Voie Impériale et le Kure Hashi, pont de style chinois, ainsi que les ruines du Miroku-ji, qui témoignent de la mise en place de l'État de Nara ; on y voit enfin le grand temple nouveau postérieur, Usa-jingu à proprement parler. C'est-à-dire que nous avons là comme un résumé topographique des grandes phases civilisationnelles du Japon, depuis la proto-histoire jusqu'à nos jours.

Comment démontrer alors cette pérennité du paysage culturel ? En mettant en avant les **manifestations folkloriques et/ou culturelles** qui l'expriment aujourd'hui : par exemple les cérémonies dans la plaine d'Okidaï, l'ambulation du Légat impérial à Usa, etc...

**Un exemple** : le défilé de la plaine d'Okidaï. Les stations de la cérémonie (doc. 24 ; 25) illustrent l'existence des communautés paysannes qui cultivaient les rizières du Jôri au Moyen-Âge et même jusqu'à l'ère Meiji, puisque, au fil du temps, le nombre de stations s'est agrandi. Elles témoignent donc de **l'évolution, dans la longue durée, d'un cadre paysager qui fut créé à l'époque de Nara** : cela correspond exactement au critère Unesco que nous avons posé plus haut : « *Un paysage vivant est un paysage qui conserve un rôle social actif dans la société contemporaine étroitement associé au mode de vie traditionnel et dans lequel le processus évolutif continue. En même temps, il montre des preuves manifestes de son évolution au cours des temps.* »

2<sup>e</sup> exemple : les sanctuaires secondaires qui jalonnent la Voie Impériale de Nakatsu à Usa. Nous avons constaté ensemble, lors d'une prospection avec Messieurs Yamamoto et

Koyanagi, que certains existent depuis le VIII<sup>e</sup> siècle. Ils ont traversé les siècles, survécu pour certains au shinbutsu bunri de la restauration Meiji, et témoignent du caractère **diachronique, évolutif**, de la topographie sacrée de notre région.

3<sup>e</sup> exemple : le **pont Chinois (Kure-hashî)** qui traverse la rivière à l'entrée du grand Sanctuaire d'Usa (Doc. 26) : il témoigne aujourd'hui encore de l'époque de la genèse de la civilisation de Nara, **imprégnée d'apports chinois et coréens** : en ce sens, on peut rapprocher le Kure-hashî du **pont aux dix arcades de Diyarbakir**, sur le Tigre, également associé au classement UNESCO, qui fondé dans l'Antiquité, reconstruit maintes fois au Moyen Age par les Arabes puis les Ottomans, traversa lui aussi, les siècles et les cultures (Doc. 27).

On voit donc, pour conclure sur ce point, que notre micro-région est une comme une fenêtre sur la civilisation antique de Nara. Mais cette fenêtre n'est pas fermée : elle nous donne à voir l'évolution du Japon, à travers les âges et jusqu'à aujourd'hui. Ce paysage n'est pas qu'historique ou archéologique : il est aussi contemporain, vivant et culturel.

Ce paysage vivant est aujourd'hui illustré, comme les jardins de l'Heysel, à Diyarbakir, par le Jôri. C'est le deuxième volet qu'il faut mettre en avant pour le classement.

On dispose déjà, à Nakatsu des aménagements de la municipalité (le « belvédère », en langue Italienne, du *Jôri*) (Doc. 28). Il faudrait expliquer en quoi ce **biotope secondaire**, né à l'époque de Nara, est original, en ce sens qu'il constitue un lieu de production (rizières), encore exploité de nos jours, qui constitue le cadre traditionnel et séculaire de la vie de paysans, avec des spécificités en termes de flore et de faune topiques (locales), toutes spécificités qui sont en **grand danger de disparition** à court terme à cause de l'avancée péri-urbaine du Japon moderne.

Ce danger de disparition constitue l'un des thèmes que l'UNESCO met souvent en avant pour ses classements : « *La protection des paysages culturels peut contribuer aux techniques modernes d'utilisation durable et de développement des terres tout en conservant ou en améliorant les valeurs naturelles du paysage.* »

Mais sur le *Jôri*, je me permettrai de renvoyer aux considérations que vous a présenté Martine.

Pour conclure, je pense qu'on pourrait peut-être donner comme « fil rouge » de ce dossier de classement l'expression que nous avons utilisée ensemble : « **Usa-Kunisaki (Kyûshû), entre Histoire et Culture : la Voie, le Jôri et le Sanctuaire** ». Elle exprime

parfaitement les deux critères UNESCO qui ont présidé au classement, en Turquie, de la Forteresse et des Jardins de l'Hevsel de Diyarbakir.

Je vous remercie beaucoup de votre attention (Doc. 29).

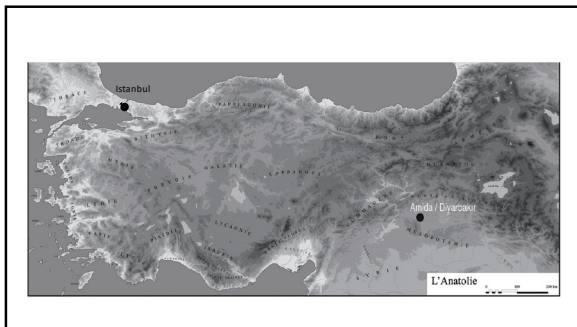




1



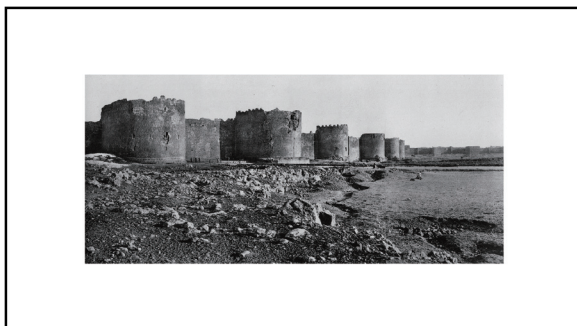
2



3



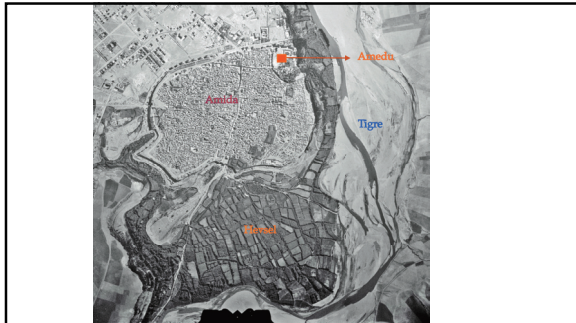
4



5



6



7



8

**La cité de Constance (337-359 ap. J.-C.)**

« Cette cité était autrefois très petite (Hanc civitatem ~~antiquam~~ perquam breuem) mais Constance, encore César à cette époque (Caesar etiam tunc), voulant donner un refuge tout à fait sûr aux habitants des environs, la ceignit de tours et de murailles puissantes, en même temps qu'il faisait d'Antoniopolis (Tella) une autre place forte ; et l'ayant pourvue d'un dépôt d'artillerie de siège, il la fit redouter des ennemis et voulut lui donner son nom (suoque nomine voluit appellari) »

Ammien Marcellin, Res Gestae, XVIII, 9, 1.  
(Trad. G. Sabbah, CUF, 1970)

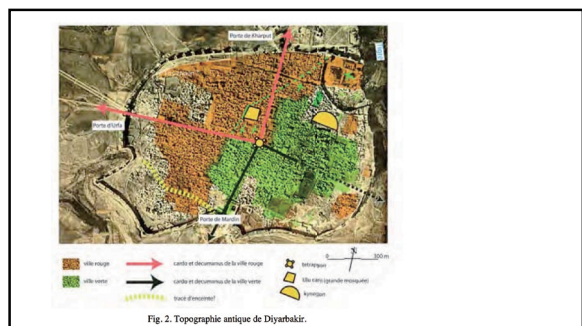
9



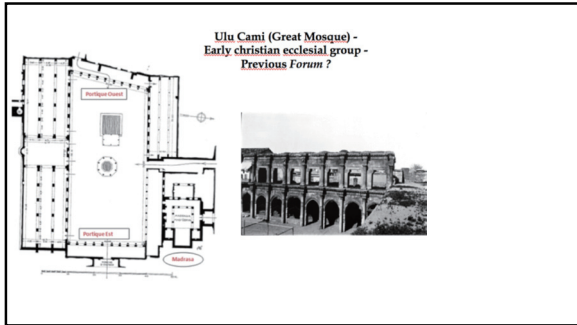
10



11



12



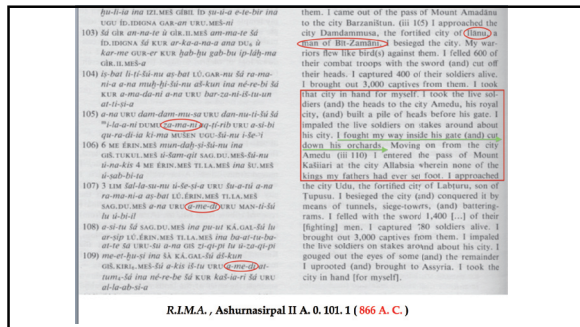
13



14



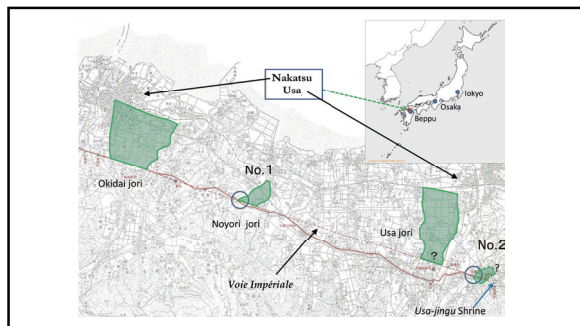
15



16

- 866 av. J.-C. - 705 av. J.-C. *Amedu/ Amedi (Neo-assyrians)*  
*Hiatus*  
(165-164 av. J.-C. *Epiphaneia* ? (Antiochos IV Epiphane)  
(IIIe siècle : *Ciuitas romana* (grand théâtre)  
- 337 ap. J.-C. « *Ciuitas perquam brevem* » (Constantius II Caesar)  
- 348-349 ap. J.-C. « *Constantiu Augusta* » (Constantius Augustus)  
- 359 siège et chute d'Amida (Shapur II)  
- 359 — 639 ap. J.-C. Byzance/Perses Sassanides/Byzance  
- 639- XI<sup>e</sup> siècle : Arabes  
- XI<sup>e</sup>-XIII<sup>e</sup> siècles : Kurdes Marwanides  
- XIII<sup>e</sup> siècle - Aujourd'hui : Turcs

17



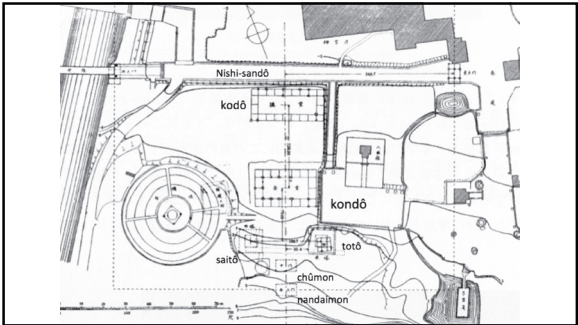
18



Le tryptique « Voie Impériale – Cadastre – Sanctuaire »  
 = Le Japon de Nara (VIII<sup>e</sup> siècle)

- 1) **Politique et administratif**  
 La Voie (Buzen – kando) = Goki-shichidō
- 2) **Economique : fiscal**  
 Le Jōri
- 3) **Religieux**  
 Le Sanctuaire d'Usa

19



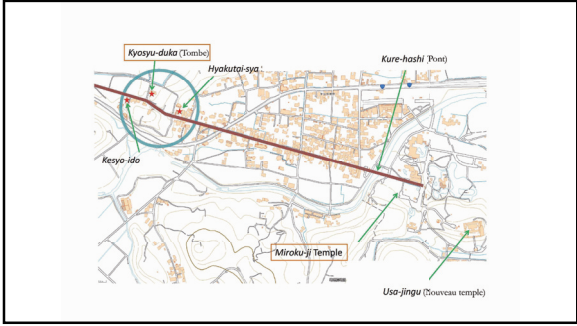
20



21



22



23



24



25



26



27



28

ありがとう (ございます)  
Je vous remercie

29



# 宇佐・国東というマイクロな地域圏の ユネスコ選定資料作成のための考察

アントワーン・ペレス（モンペリエ第三大学）  
廣岡 恵美子 訳（別府大学）

はじめに

私が皆様にお話ししたいのは、宇佐・国東地域全体のユネスコ世界遺産への登録資料が、2015年のディヤルバクル（古代名アミダ）の城塞と庭園<sup>1</sup>の文化的景観という資格での選定の事例から着想を得られるとしたら、どのような点においてかということです。

2015年7月のディヤルバクル（古代名アミダ）のユネスコ選定のタイトルは、「ディヤルバクル城塞とヘヴセル庭園の文化的景観」です。

つまり、この登録は2つの対象に適用されました(資料1, 2, 3)。

まずはその城塞です。それは都市とその歴史の古さ、都市に広がった古代末期のローマ文明や、その後、都市を占領した文明に特徴的な、技術的・建築的技能を証言する特別なものです(資料4, 5, 6)。

ユネスコ登録基準：人類の歴史において、1つ、またはいくつかの重要な時代を示す建造物や、建築または技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な例であること。

もう一つは、城塞に地形学的に関連しているヘヴセル庭園です。それは、今日まで保存されてきた実際の付随的な生物環境（ビオトープ）であり、今日も生きて機能する、独創的で稀な経済的・文化的遺産です。

ユネスコ登録基準：本質的に変化する景観であること。生きた景観とは、伝統的な生活様式に密接に結びつけられた現代社会の中で、積極的な社会的役割を保持している景観であり、変化が継続しているものである。同時に、時の経過の中でその進化の明白な証拠を示すものである。

さて、中津・宇佐・国東地域には、2つのユネスコ登録基準に対応する2つの要素があることがわかります。一つ目は豊前の官道・条里・宇佐神宮という連なり、もう一方は条里そのものです。

このことから、宇佐・国東というマイクロ地域圏のユネスコ選定を検討するための、比較可能な議論手順を用いることができるように思われます。

## A) ディヤルバクル城塞－アミダについて

まず、ディヤルバクルのケースを見てみましょう。

城塞が選定される理由となったのは、固有の建築的価値を有していること、そして、その

---

<sup>1</sup> 私たちが「庭園」と聞くと、草木や花が美しく植えられた人工的なものをイメージすることが多い。実際のヘヴセル庭園は果樹園や野菜畑が広がる土地であり、食料や水の供給の場となっていることから、景観的には「田園」という表現の方が実態に近いイメージをもってもらえそうである。

城塞が古代ローマ時代から数世紀間一つの都市を閉じ込めていたという事実です。

建造物の技術や建築的特徴についての話にはあまり時間をかけず、それが特徴づけ、それが指し示している都市についての話に時間をとりましょう。

アマダの城塞は、現在見ることができる部分においては、主に 337 年から 349 年にかけて皇帝コンスタンティウス 2 世によって造られました。このことはアンミアヌス・マルケリヌスの有名な文書からわかります。この城塞は、古代からローマ人や 6 世紀のユスティニアヌスを例とするビザンツ皇帝たちによって修復され、続いて、10 世紀から 11 世にかけてアラブ人によって修復されてきました。その時、アラブ人たちは美しくすばらしい碑文で装飾しています。そして、最終的にはオスマン帝国の人々が城塞の修復・保持を続け、使用された玄武岩の色が暗かったことから、町に「カラ・アミド」（黒のアミダ）の名をもたらししました。この名前は、中世ヴェニス人の文書の中にある「カラミ」という変化した綴り字でヨーロッパでも知られています。

つまり、世界中どこでも、ディヤルバクルはその城塞と常に結びつけられてきたため、この建造物がユネスコの調査員たちの注意を引いたのは当然のことです。

しかし、この城塞はひとつの都市、非常に特殊な歴史を指しています。それが、またユネスコの注意を引いた点でもあります。

結局、この城塞は、ペルシャ人との末端の境界にあるローマ帝国の最も端の砦として、ローマの性格の特徴を総合しています。これは、九州の蛮族に立ち向かう大和国家の最も端の地であった宇佐地域の外形とちょうど同じです。

しかし、同時に、城塞は時間の流れの中でその完全さを一度も問題にすることがなかった多くの貢献を取り入れながら、いくつもの世紀と文明を渡りました。このことは城塞に普遍的な結果を与えています。

アセナ先生と私は、歴史的な事に関する資料の作成に参加しました。特にディヤルバクルの城塞が誕生するのを目撃した古代ローマ時代に関してのものです。私たちは、ディヤルバクル城塞は千年を経た都市を取り囲んでいるということを明らかにしました。

### 異なる時代の 2 つのローマ都市

城塞は、ローマ都市に特有の地形学的構成を持つ都市を閉じ込めています。四連のアーチ（資料 11）に関しては、年代的に異なる 2 つの都市を決定する 4 つの軸が当てられました。1 つ目の都市（資料 12）は、おそらくコンスタンティウス 2 世の都市で、これはアンミアヌス・マルケリヌスの文章に合致しています。もう一つの都市は、おそらく時代的には前のものです。実際に、その方位は異なっていて、資料 13 の図から分かるように、現在の大モスクの中庭にある東のコロネード（列柱）が都市を象徴しています。その建築術的な装飾は明らかに 3 世紀前半の時代とセウエルス期の影響を見て取れます（資料 14）。したがって、後者の都市は末期ローマ帝国の時代よりずっと前のある別の時代を反映しているということで、アマダという都市が古代の長い期間記される（刻まれる）ことになるわけです。

この時期、初期ローマ帝国は古典劇場の発見に結び付けられるかもしれませんが（資料 15）。この建造物は、帝国初期のものでしかありえないでしょう。そして、それはさらにアマダがすでに 3 世紀には重要な都市であったことを示しています。実際、劇場の建造物は、東ロー



マ帝国の劇場の中では大きさの面でシリアのアパメ劇場に次いで二番に格づけされるかもしれませんが。

しかし、アミダはおそらくさらにもっと古いのです。まず、ヘレニズムの都市国家ポリス（紀元前2世紀）というものがあります。

ヘレニズム時代の都市国家の年表を紀元前2世紀にさかのぼって、その都市国家は、紀元前164年から前163年の間に、王アンティオコス4世<sup>2</sup>によってエピファネイア・カタ・ティグルの名で王立都市としてまことしやかに創られました。このことは古典シリア語の写本（オリエントのキリスト教徒たちの言葉で書かれたもの）に記されています。

そして、アッシリア帝国の地方中心都市（紀元前9～8世紀）があります。その都市はさらに古い紀元前9世紀という遠い原史時代から存在していました。ここで、アメディという名の都市が、紀元前866年に新アッシリア帝国の王、アシュールナツィルパル2世によって攻囲されたことがわかります。そして、この都市の庭園は破壊されました（資料16）。

このことは、a)まず、都市が、鉄器時代の始めにはアメディという同じ名前ですでに存在していたことを示しています。アメディは後にラテン語化されてアミダになりました。b)そして、おそらくこの遠い時代には、末期ローマ帝国の城塞のことも、ヘヴセルの庭園のこともないにしても、この時代から都市が城塞と庭園を備えていたということです。ここで私たちは青銅器時代の都市がどこにあったかがわかります（資料7）。

都市が陥落した後、この青銅器時代の都市は紀元前705年まで新アッシリア帝国の地方中心都市でした。この都市は後に記録から消え、次に現れたのは、先ほど見たように、アンミアヌス・マルケリヌスが筆をとった一千年後でした。

アセナ先生と私の作業は、末期ローマ帝国のアッシリア時代を当時まで分けていた、歴史的・年代的隙間を埋めることにありました。

私たちの作業は、歴史的部分をより実体的なものにし、アミダの城塞の内部を特徴付けている、ある意味建造物的空間というようなものを埋めるため、ユネスコの選定の資料に加えられました。

しかし、すでに言ったように、城塞と都市の歴史はローマ時代に止まることはありませんでした。実際、アミダは長い間ペルシャ人によって保持された後、ビザンツ帝国の主要な都市の一つになり、639年にアラブ人によって征服されました。次にクルド王朝、その次にトルコ人が続いて都市を攻囲したので、今日までいくつもの時代と文明を経てきたことになりました。それはこの後の資料17でわかります。

このように継続的に支配されている間、城塞は一度も破壊されることはありませんでした。それどころか常に使用され、飾られ、拡大されてきました。城塞はまさに「人類の歴史における重要な、一つまたは複数の時代を示す景観」となっているのです。

## B) 古代の豊前国：宇佐・国東

宇佐・国東の景観システムとの比較がなされなければなりません。何故でしょうか。それは、わたしたちにはそこでも記念建造物的なもの、あるいは、景観的なものがあるからです。

---

<sup>2</sup> Epiphane は、ヘレニズム時代の小アジア・エジプト諸王の添え名

この景観は人間の歴史の古典的な時代（奈良時代）を証言していますが、歴史的、政治的、社会経済的な大きな変化を越えて、今日まで存在し続けてきたものです。

わたしたち具体的に何があるかという、天皇の道（勅使街道）と地割（条里）、そして宇佐神宮という連なりです（資料 18）。それは奈良という歴史的時代の、地形的で、目に見える、他に類のない表現です。すなわち、それは大和国家による律令体制の地域的な適用を示すと同時に、政治と行政の面では街道を、経済の面では条里を、そして宗教の面では八幡宮を示しています（資料 19）。年代的・歴史的観点から一貫しているこの景観は、宇佐・国東というミクロな地域（古代の豊前国）においてそれを演出するよい方法が見出されさえすれば完璧に認知されることができます。

この一貫性は、特に奈良の古代天皇制の定義そのものに、聖なる土地を結合させる有機的なつながりを強調することによって主張されねばなりません。これが、豊前官道が 8 世紀の後半に中津条里を宇佐神宮境内の弥勒寺に結び付ける地形的要素の中核である理由です。その年代は付随的な聖域の建設の後であり、日本の国家が九州の領域を統一し終えた時でした（資料 20）。

次のようにユネスコを説得しなければなりません。われわれのミクロな地域圏、すなわち最初の大規模国家ヤマトのテルミヌス（境界）は、日本の他のすべての地方以上に、古代日本のショーウィンドーのようなもので、奈良周辺部の関西（畿内）とシンメトリー（左右対称）なのであると。征服地の戦士の神である八幡神は日本人民全体の保護神であり、東大寺の守護神である。その主たる聖域は最も古いものがここ宇佐にある。そして、それに結び付けられている地形的な組織形成のすべては一つの文字のように日本の古典的な国家誕生の証明書であると。

この地形は統治者の地位、すなわち奈良の天皇を表すと同時に、神道と仏教のあらたな宗教的混淆（神仏習合）を表しています。例えば、恐らくユネスコの代表団に次のことを説明する必要があります。素晴らしい儀式である勅使による象徴的な宇佐行幸が、様々な歴史的な事情において誕生したものであるとはいえ、749 年の奈良東大寺での八幡神の巫女が乗る神輿の儀式的な入京と、どう明らかなつながりがあるかです。その年（749 年）は聖武天皇の御代の最後であり、この天皇が新たな宗教的教義の基礎を置いた時でした（資料 21、22）

しかしこの景観は、8 世紀の奈良の体制の終焉とともに変化を止めることはありませんでした。それどころか、条里の地片は拡大し発展し続けましたが、それは新たな社会的・政治的文脈においてでした。例えば、飯沼教授が示したように、荘園制度や中世の領主による空間の所有や仏教寺院の大土地所有です。

同様に、天皇の道（勅使街道）は、行程（コース）の特徴的な道筋 [つまり直線] において確かに曲げられ、時折変更されましたが、今日まで宇佐神宮と結びつき続けました。そしてこの神宮それ自体は江戸時代や現代まで多くの増補の対象になりました。そこではまた、アミダ（現ディヤルバクル）で見られたように、自然景観のモニュメントが一つの時代の保管庫をなしているのですが、その完全さ [真正さ] が決して全く脅威にさらされることなく、新たな歴史的、政治的文脈に順応しています。

この点を小柳先生によって作成された宇佐神宮周辺のスライドで説明しましょう。そこで

はすべてのものが同時に見られます。限定された空間において、凶首塚（「蛮族隼人の墓」）が歴史時代以前の九州を証明するものです。同様に、そこから遠くないところで、古典的な国家建設以前の大和時代の古墳が見られます。そして、勅使街道と中国風の橋である呉橋です。そして、弥勒寺の遺跡です。こちらは奈良国家の（伽藍）配置を証明しています。最後に見られるのが後の新たな神社、宇佐神宮です。すなわち、そこには歴史時代以前から現代までの日本の大きな文明段階を地形の上に要約したようなものがあるのです。

では、文化的景観のこの永続性をどのように証明したらいいでしょうか。それは、そのことを今日表現している民俗芸能的、あるいは文化的な行事を前面に打ち出すことによってです。例えば、中津の沖代平野での儀礼〔花傘鉾祭〕や宇佐への勅使の行幸〔今回は 2025 年〕などです。

#### 事例 1：沖代平野の（花傘鉾祭）行列

祭礼の立ち寄る地点（資料 24、25）は農民の共同体の存在を示しています。彼らは中世に、そして明治時代に至るまでも条里の水田を耕していました。というのも、時が経つにつれて、立ち寄る地点の数が増えたからです。従ってそれらは奈良時代に開設された景観の枠組みの長期にわたる進化を証言しています。このことはまさしくわれわれが前に挙げたユネスコの基準に対応しています。

「生きている景観とは、伝統的な生活様式に密接に結びつけられた現代社会の中で、積極的な社会的役割を保持している景観であり、変化が継続しているものである。同時に、時の経過の中でその進化の明白な証拠を示すものである。」

#### 事例 2：中津から宇佐への勅使街道に沿って点在する付随的聖域

われわれは、山本先生や小柳先生との調査の際に、そのいくつかは 8 世紀以来残存していることを共に確認しました。それらは何世紀にもわたっており、いくつかは明治維新の神仏分離〔廃仏毀釈〕を生き残りました。このことは、この地方の聖なる地形が時代を通して進化している特徴を示しています。

#### 事例 3：宇佐神宮の入り口で川に渡された中国風の橋（呉橋）（資料 26）

それは中国や朝鮮の貢献が浸透している奈良文明の誕生の時期を今日なお証明しています。この意味において、呉橋はティグリス河にかかるディヤルバクルの 10 のアーチ橋と比較されることができます。それはユネスコ選定に同様に結びつけられていますが、古代に建設され、中世にはアラブ人、それからオスマン帝国によって幾度か再建され、それ自体何世紀もそしていくつもの文化を経ました（資料 27）。

したがって、この点について結論すれば、以下のことがわかります。われわれのミクロ地域圏は奈良の古代文明に対する窓のようなものであるということです。しかし、この窓は閉じられてはいません。それは時代を超え、われわれに今日までの日本の進化を見させてくれます。この景観は歴史的、あるいは考古学的なものにすぎません。それはまた現代的なものであり、生きたものであり文化的なものなのです。

この生きた景観はディヤルバクルのヘヴセル庭園と同様に、条里によって今日示されています。それは選定のために前面に打ち出さなければならない第二の扉です。

中津では既に市による設備（条里の見晴らし台、イタリア語でベルベデーレ）が設置され

ています（資料28）。説明しなければならないことは、どのような点で奈良時代に生まれたこの付随的な生物環境（ビオトープ）が独自のであるのかですが、その意味で言うなら、それが生産の場（水田）をなしていること。また、今日でも利用されていて、農民の生活の伝統的で何世紀にもわたる枠組みを構成していること。そして、特徴的（つまり地域的）な植物相や動物相の観点から特異なものを伴っていること。さらに、近代日本の都市周辺部の進展のために短期間ですべての特異なものは大きな消滅の危機に陥るといことです。

この消滅の危機はユネスコがしばしばその選定のために前面に押し出しているテーマの一つになっています。

「文化的景観の保護は、景観の自然的な価値を、保護あるいは改良することによって、持続的な土地利用に関する現代技術や土地発展に寄与することができるのである。」

しかし条里に関して、私は、アセナ先生が皆様に提起した考察を繰り返すことになるでしょう。

結論として考えますと、恐らく以下の表現が世界遺産の選定書類の「赤い糸（導きの糸）」として与えられるのではないのでしょうか。その表現をわれわれは包括的に使用しました。すなわち「歴史と文化にわたる宇佐・国東一道、条里、寺社一」というものです。これはまさしく（世界遺産の）選定を主宰するユネスコの、トルコにおけるディヤルバクルの城塞とヘヴセル庭園についての2つの（世界遺産登録）基準を表しています。

ご清聴ありがとうございました（資料29）。

## Résumé de ma communication pour une proposition de classement

### UNESCO dans la catégorie de paysage culturel.

Antoine PÉREZ (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

#### - Turquie.

Le classement Unesco de Diyarbakir – Amida (juillet 2015) s'applique à deux objets :

1) - d'une part ses murailles exceptionnelles qui témoignent de l'antiquité de la ville et de son histoire, d'un savoir-faire technique et architectural caractéristique de la civilisation romaine de l'Antiquité tardive.

(critère Unesco = « *offrir un exemple éminent d'un type de construction ou d'ensemble architectural ou technologique ou de paysage illustrant une ou des périodes significative(s) de l'histoire humaine* ».)

2) - d'autre part, les jardins de l'Hevsel, topographiquement liés à la muraille, véritable biotope secondaire qui ont été entretenus jusqu'à aujourd'hui et constituent un patrimoine économique et culturel original et exceptionnel, encore vivant aujourd'hui.

(critère Unesco = « *le paysage essentiellement évolutif*. » « *Un paysage vivant est un paysage qui conserve un rôle social actif dans la société contemporaine étroitement associé au mode de vie traditionnel et dans lequel le processus évolutif continue. En même temps, il montre des preuves manifestes de son évolution au cours des temps.* »)

#### - Japon.

Or, on retrouve ces deux mêmes éléments, répondant aux deux mêmes critères de l'Unesco, dans notre région de Nakatsu-Usa-Kunisaki. - Pourquoi ?

1) - d'un part, le tryptique Voie Impériale - Cadastre (Jôri) - Sanctuaire d'Usa : il constitue un résumé unique en son genre de la période historique de Nara, c'est-à-dire

une illustration de l'application territoriale par l'État du Yamato du régime des Codes (ritsu-ryō), à la fois au plan politique et administratif (la Voie), économique (le Jōri) et religieux (le Sanctuaire d'Hachiman). Ce paysage cohérent du point de vue chronologique et historique, est parfaitement perceptible dans la micro-région d'Usa-Kunisaki (la province antique de Buzen) pour peu qu'on trouve la bonne manière de le mettre en scène.

Il faut insister sur cette cohérence, notamment en mettant l'accent sur le lien organique unissant la topographie sacrée à la définition même du régime impérial antique de Nara (définition du syncrétisme shinto-bouddhique et divinisation de la figure du tenno antique = Shōmu).

2) - d'autre part, un **biotope secondaire remarquable (le Jōri)**, qui a traversé les siècles (comme l'Hevsel) et qui est aujourd'hui encore (exemple de la plaine d'Okidai à Nakatsu) le cadre du travail des hommes (rizières), ainsi que l'objet de manifestations folkloriques et culturelles d'un intérêt majeur. Cet aspect anthropologique se rapproche des jardins de l'Hevsel. Il est évidemment plus facile à mettre en perspective devant les experts de l'Unesco.

Il faut ici insister sur la menace que fait planer la péri-urbanisation très rapide sur l'existence même, à très court terme, de ce paysage du Jōri, menace qu'ont pris en compte les autorités publiques locales, en « sanctuarisant », à Nakatsu, une portion de ce paysage.

\*

Ces deux objets (qui répondent aux deux critères Unesco) doivent être mis en cohérence dans le dossier de classement, selon un protocole qui peut s'inspirer, selon moi, de celui du dossier de classement d'Amida.



# 「文化的景観」の категорияでのユネスコ登録の提案に関する

## 報告レジュメ

アントワヌ・ペレス（モンペリエ第三大学）

飯坂 晃治 訳（別府大学）

### －トルコ

「ディヤルバクルーアミダ」のユネスコ登録（2015年7月）の対象となったのは、ふたつの遺産である。

1) ーひとつはすばらしい城壁である。この城壁はその都市の古さと歴史、すなわち、古代末期のローマ文明の特徴である技術・建築のノウハウを示している。

（ユネスコの基準＝《歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。》）

2) ーいまひとつはヘヴセル庭園である。地形的に城壁に近接しているこの庭園は、今日まで維持されてきた真の「二次的ビオトープ」<sup>3</sup>であり、今日もなお存続する、独特ですばらしい経済的・文化的遺産である。

（ユネスコの基準＝《本質的に変化する景観。》《生きた景観とは、伝統的な生活様式に密接に関与した現代の共同体において、今日の社会的役割を維持し、発展の過程が継続している景観である。同時にそれは時間の経過による変遷の明白な証拠を示す。》）

### －日本

ところで、ユネスコの上のふたつの基準に対応する、同じふたつの要素が中津・宇佐・国東地域に見られる。－なぜか？

1) ーまずは、勅使街道－条里制－宇佐の聖域という三部作である：それは、奈良時代のその種のものでは異色の縮図である。すなわちそれは、律令制をとるヤマト政権の領域支配を説

---

<sup>3</sup> 「ビオトープ」とは生物群集が存在できる環境条件を備える地域のことで、「二次的ビオトープ」とは人が手を加えることで維持・管理されてきたビオトープを意味する。

明すると同時に、その領域支配を政治・行政（街道）、経済（条里）、そして宗教（八幡神の神域）の面から説明するものでもある。通時的・歴史的な観点から見た、そのひとまとまりの景観は、よい提示方法を見つけさえすれば、宇佐－国東（旧豊前国）というマイクロ・レベルの地域において非常によく認識できるのである。

とりわけ、聖域の地勢と、奈良の古代天皇制の発現（神仏習合の発現と古代天皇＝聖武という人間の神格化）とを結びつける有機的なつながりに焦点を当て、そのまとまりを強調する必要がある。

2) つぎに、注目すべき「二次的ビオトープ」（条里）である。これは、（ヘヴセル庭園と同様に）何世紀にもわたって存続し、今日もなお（中津市の沖代条里に代表されるように）人々の労働の対象（水田）となっている。また、重要な意義を持つ風俗や文化の表れでもある。こうした人類学的側面は、ヘヴセル庭園と類似する。ユネスコの専門家の前で、それを一望の下に提示することは間違いなく容易である。

ここでは、条里の景観の存続そのものに短期間のうちに迫る、周辺部分の急速な都市化という脅威を強調する必要がある。中津ではその景観の一部を《聖域化》しており、地方自治体はその脅威について考慮している。

\*

私の見解では、このふたつの対象（ユネスコのふたつの基準に対応する）は、アミダの登録申請に範をとったやり方にしたいが、登録申請に際してまとめて扱われるべきである。



# Le Jôri de Nakatsu, la forteresse de Diyarbakır (Amida) et des jardins de l'Hevsel : deux paysages culturels, deux histoires, deux projets.

Martine ASSÉNAT (Université Paul-Valéry Montpellier 3)

Face à la guerre et à des intérêts éloignés de ceux l'humanité et de ses cultures, les engagements pris pour la sauvegarde du site du « Paysage culturel de la forteresse de Diyarbakır et des jardins de l'Hevsel » n'ont pas résisté. Après le classement du site au patrimoine mondial de l'UNESCO en juillet 2015, le conflit armé opposant l'état turc aux forces du PKK a en effet débouché sur la destruction d'une partie de la ville antique. Nous voudrions ici revenir néanmoins sur l'approche développée dans le dossier de candidature et montrer pourquoi la catégorie « paysage culturel » a été choisie à Diyarbakır par les porteurs du projet et retenue par l'UNESCO, et pourquoi ce choix pourrait, de point de vue de la méthode, l'être aussi pour le Jôri de Nakatsu, s'agissant, en particulier, des projets de société dont peuvent être porteurs les dossiers. Si l'UNESCO n'a retenu que le critère iv pour le classement de Diyarbakır, le choix des critères pour le Jôri pourrait quant à lui être plus large et inclure d'autres critères. Le texte proposé ici est un canevas de travail qui donne quelques éléments de comparaison entre les deux sites.

## La Terminologie de l'UNESCO relative au paysage culturel et le cas du Jôri de Nakatsu

Le « site » (<https://whc.unesco.org/fr/PaysagesCulturels/>)

Depuis 1992, la Convention du Patrimoine mondial reconnaît et protège les paysages culturels qu'elle définit à l'article 1. Sont considérés comme « patrimoine culturel » : « les monuments qui sont des œuvres architecturales », « les ensembles qui sont des groupes de constructions isolées ou réunies », et « les sites qui sont des œuvres de l'homme ou œuvres conjuguées de l'homme et de la nature ». Le cas du Jôri de Nakatsu correspond à la définition du « site ». Depuis cette date de nombreux pays ont mobilisé cette catégorie pour faire classer des sites. La Chine, l'Allemagne, la France, l'Italie ou le Royaume-Uni de Grande-Bretagne et d'Irlande du Nord, par exemple, l'utilisent beaucoup. Au Japon, sur les

23 sites classés, 2 sont des « paysages culturels » ; ce sont les Sites sacrés et chemins de pèlerinage dans les monts Kii et la Mine d'argent d'Iwami Ginzan et son paysage culturel.

Pour l'UNESCO les paysages culturels « illustrent l'évolution de la société et des occupations humaines au cours des âges, sous l'influence des contraintes et/ou des atouts présentés par leur environnement naturel, et sous l'effet des forces sociales, économiques et culturelles successives, internes et externes. »

Le Jôri de Nakatsu répond aux orientations suivantes des textes de cadrage de l'UNESCO :

« Les paysages culturels reflètent souvent des techniques spécifiques d'utilisation durable des terres, prenant en considération les caractéristiques et les limites de l'environnement naturel dans lequel ils sont établis, ainsi qu'une relation spirituelle spécifique avec la nature. » (annexe 3 p. 89 et suiv.)

Le système du Jôri a été mis en place au VIIIe s. Il représente à la fois une organisation sociale et politique (État de Nara), spirituelle (voie, temples, processions) et vivrière (riziculture).

« La protection des paysages culturels peut contribuer aux techniques modernes d'utilisation durable et de développement des terres tout en conservant ou en améliorant les valeurs naturelles du paysage. »

La protection du Jôri nécessiterait une prise de conscience des décideurs locaux du bien-fondé de l'arrêt de l'urbanisation.



« L'existence permanente de formes traditionnelles d'utilisation des terres soutient la diversité biologique dans de nombreuses régions du monde. La protection des paysages culturels traditionnels est par conséquent utile pour le maintien d'une diversité biologique. »

La protection du Jôri favoriserait le maintien des paysans sur leurs terres et la protection de la faune et de la flore (espèces topiques de poissons et plantes micro-locales).

L'UNESCO classe ensuite les paysages culturels en catégories (<http://whc.unesco.org/archive/opguide08-fr.pdf#annex3>). Selon moi, le Jôri correspond plus précisément à la deuxième catégorie qui définit « le paysage essentiellement évolutif. Il résulte d'une exigence à l'origine sociale, économique, administrative et/ou religieuse et atteint sa forme actuelle par association et en réponse à son environnement naturel. Ces paysages reflètent ce processus évolutif dans leur forme et leur composition. » ; et à la subdivision suivante : « Un paysage vivant est un paysage qui conserve un rôle social actif dans la société contemporaine étroitement associé au mode de vie traditionnel et dans lequel le processus évolutif continue. En même temps, il montre des preuves manifestes de son évolution au cours des temps. »

Le Jôri a organisé l'espace : il est l'expression foncière du régime politique et administratif des Codes hérité de la Chine ; il est le cadre visible de l'exercice du pouvoir ; s'y célèbrent des rites liés à la fois à l'économie (récoltes, donc production agricole) et aux divinités shinto locales (Hachiman), en même temps qu'à la divinité de l'Empereur). Bien qu'ayant

évolué avec son temps (pratiques agricoles et hydrauliques, adaptations des processions, et reconstructions rituelles des temples), il demeure un paysage historique vivant.

Les critères (<https://whc.unesco.org/fr/criteres/>)



Sont ensuite déterminants les critères sous lesquels l'inscription demande à être réalisée. Des 10 critères de l'UNESCO les suivants me semblent devoir être considérés.

Le critère (ii) : « témoigner d'un échange d'influences considérable pendant une période donnée ou dans une aire culturelle déterminée, sur le développement de l'architecture ou de la technologie, des arts monumentaux, de la planification des villes ou de la création de paysages ».

Les ambassadeurs japonais partis à la cour des Sui et des Tang ont d'abord importé toute la codification de l'état chinois pendant quelques décennies. De même les Japonais ont fait venir de Corée des ingénieurs hydrauliciens et géomètres auxquels ils ont confié la réalisation du Jōri. Ensuite le Japon se replie sur lui-même à partir de la fin du VIII<sup>ème</sup> siècle.

Le critère (iii) : « apporter un témoignage unique ou du moins exceptionnel sur une tradition culturelle ou une civilisation vivante ou disparue ».

Le Jōri est à la fois le témoin exceptionnel d'une civilisation disparue car son fonctionnement primitif originel ne dure que quelques décennies entre le VII<sup>ème</sup> et le VIII<sup>ème</sup> siècles, c'est-à-dire l'époque de Nara. En ce sens il représente une des seules traces de la société japonaise antique. Il est ensuite très tôt réutilisé, puis développé dans le cadre

des shoen médiévaux (domaines féodaux et/ou des temples) qui ont permis la pérennisation de ses formes. (Mais ce critère iii peut se retrouver dans le critère iv.)

Le critère (iv) : « offrir un exemple éminent d'un type de construction ou d'ensemble architectural ou technologique ou de paysage illustrant une ou des périodes significative(s) de l'histoire humaine ».

Le Jôri est un exemple éminent de la mise en place de l'état de Nara. Il correspond à l'application provinciale de la fondation du pouvoir nippon au VIIème siècle et conserve le souvenir vivant de l'articulation entre le fonctionnement des temples, l'organisation de la récolte du riz, l'utilisation d'un système hydraulique historique pour l'irrigation des parcelles, le Jôri lui-même (paysage rizicole organisé en damier), sa toponymie, la Voie Impériale sacrée et les temples qui la bordent, les rites qui sont associés à ces espaces. Outre le temple, il inclut un lac sacré bordé de kusu (arbre sacrés) et également un bois sacré.

Le critère (v) : « être un exemple éminent d'établissement humain traditionnel, de l'utilisation traditionnelle du territoire ou de la mer, qui soit représentatif d'une culture (ou de cultures), ou de l'interaction humaine avec l'environnement, spécialement quand celui-ci est devenu vulnérable sous l'impact d'une mutation irréversible ».

Le Jôri est l'expression géographique exceptionnelle de la combinaison entre les dynamiques économiques, politiques et religieuses de la société japonaise antique, puis médiévale, et toujours traditionnelle et son environnement naturel. Il est le réceptacle de cultes liés à la nature, au cycle des saisons et au partage de l'eau et de la terre. Autrefois généralisé dans l'empire de Nara, il est aujourd'hui devenu rare et sa préservation dans la plaine d'Okidaï, à Nakatsu, est exceptionnelle.

Le critère (vi) « être directement ou matériellement associé à des événements ou des traditions vivantes, des idées, des croyances ou des œuvres artistiques et littéraires ayant une signification universelle exceptionnelle (Le Comité considère que ce critère doit préférablement être utilisé en conjonction avec d'autres critères) ».

Persistent de nombreuses fêtes et ambulations. Ainsi le sanctuaire d'Usa dédié au culte de la divinité d'Hachiman bénéficie d'une attention particulière de la part de la cour impériale dès le VIIIe s., puisqu'il est précisément lié à la genèse et à la définition même du pouvoir impérial japonais. Il est le premier construit sur les 40 000 sanctuaires actuels du Japon. Il est le cadre de fêtes et de légendes associées à l'hydrologie régionale et à l'organisation hydraulique du Jôri. Ainsi des traditions liées au Jôri de Nakatsu lui-même, et également au sanctuaire d'Oïdé, du temple d'Hachiman Tsuruichi, de la fête de la traversée de la rivière Ogata, de la fête Hanagasaboko du sanctuaire Tsuruichi-Hachiman, de la fête



d'octobre des trois sanctuaires de Tashibu Hachiman (Inuma, 2016, 2018, 2019 ; Pérez, 2020).

Le bien classé doit également répondre à des critères d'authenticité et d'intégrité.

Sur ce point c'est la convention de Nara qui s'applique (justement). Le caractère authentique du Jôri et des installations qui le jalonnent ne fait aucun doute. S'agissant de l'intégrité, il faudrait arriver à savoir comment présenter les zones urbanisées.

Pour prouver sa valeur universelle le bien doit aussi être comparé à d'autres sites classés.

### Le dossier administratif

Dans le dossier UNESCO une grande partie du montage administratif revient bien sûr aux autorités administratives compétentes d'où émane la demande. A Diyarbakır la demande émanait de la mairie métropolitaine qui a organisé la constitution du dossier. Mais dans tous les cas seul l'État partie, à savoir pour nous ici le Japon, peut déposer officiellement la candidature. Il faut donc convaincre, et c'est un point essentiel, en premier lieu, les autorités locales compétentes, celles qui ont un pouvoir sur la gestion du site et qui peuvent prendre des mesures de protections, de l'intérêt du dossier.

Une part importante du travail doit aussi être effectuée par les chercheurs qui sont à même de mettre en valeur la haute teneur historique du site et son importance.

L'Université de Beppu et l'Université de Montpellier ont publié les résultats de telles recherches qui ont notamment porté sur les temples, sur la Voie impériale, sur l'organisation interne du Jôri. Il a été montré en quoi ce système avait constitué pendant des siècles le socle sociétal de la région de Nakatsu et d'Usa (Inuma, 2016, 2017, 2018 ; Pérez, 2019).

Le classement du « paysage culturel de la forteresse de Diyarbakır et des jardins de l'Hevsel » : quelques points de comparaison avec le Jôri de Nakatsu.



## Le paysage culturel

A Diyarbakir la catégorie paysage culturel a été soutenue par la présence de la vallée du Tigre et de la zone fertile des jardins de l'Hevsel située entre la ville et le fleuve. C'est le fleuve et la loupe des jardins qui ont permis à la ville de s'alimenter et qui ont assuré sa pérennité. La ville a tiré avantage de sa position géographique qui lui a permis de grandir et de jouer un rôle politique majeur en haute-Mésopotamie. La muraille extraordinaire témoigne de cette force et a permis le développement de nombreuses cultures. C'est la



combinaison d'un emplacement surplombant une vallée fertile qui fait du site un paysage culturel.

(<https://whc.unesco.org/archive/2015/whc15-39com-inf8B1-fr.pdf>)

Ces conclusions s'appuient en partie sur une série d'études et notamment sur plusieurs workshops organisés à Montpellier où archéologues et historiens ont mis en avant les points suivants (Assénat, 2015a ; Assénat, 2018).

Amida, jusqu'où le Tigre est navigable, fut le point de contact obligé des échanges entre les monts Taurus au Nord et le Chatt el Arab au Sud. La cité fortifiée est posée à l'extrémité du plateau basaltique qui surplombe la zone des jardins de l'Hevsel, tandis que le tracé de la muraille épouse sur une grande partie de son parcours la ligne des falaises d'une coulée de lave. Situés aux pieds de la ville, les jardins s'étagent en une série de terrasses inclinées vers le fleuve. Ils constituèrent également un espace vivrier exceptionnellement fertile, irrigué en permanence par l'eau du Karacadağ, en même temps qu'une réserve de matériaux de construction (Assénat, 2015b).

Pour expliquer le caractère culturel du paysage ont été pris en compte les éléments susceptibles de documenter les interactions matérielles entre ces différents espaces, notamment par l'étude du milieu naturel et de ses transformations anthropiques. Ce propos soulève bien-sûr de nombreuses questions que nous ne pouvons pas aborder de façon exhaustive ici.

Il nous a d'abord semblé opportun de souligner la question des circulations entre le fleuve, les jardins de l'Hevsel et la ville. En tant qu'archéologues-historiens nous avons mis en exergue les effets des trajets de l'eau, les trajets des hommes, et ceux liés aux transports des matières premières notamment de celles utilisées pour la construction de la ville.

Nous avons d'abord cherché à restituer l'environnement dans lequel ces trajets s'inscrivaient en faisant appel à des géologues et géomorphologues. Leur étude nous a renseigné sur les étapes de la formation des terrasses entre la ville et le Tigre sur lesquelles les jardins ont été aménagés (Kuzucuoglu, Karadogan, 2015 ; Karadogan, Yildirim, 2015).

Nous avons également enquêté dans les sources pour connaître l'origine des jardins. Ils apparaissent pour la première fois dans une inscription en cunéiforme du premier millénaire (866 av. J.-C.) qui relate la destruction des vergers d'Amedu par le roi néo-assyrien Assurnasirpal II (Pérez, 2015).

Nous nous sommes également intéressés, au réseau hydrologique et aux installations hydrauliques lesquels occupent une place importante dans la tradition écrite et ce dès l'époque d'Ammien Marcellin (XVIII, IX, 1) : « Face à l'haleine du Zéphyr, elle (Amida) touche à la Gumathène, région fertile que la culture met aussi en valeur, et où se trouve un bourg nommé Abarné, bien connu pour ses thermes aux eaux chaudes et bienfaisantes ; du reste, au centre même d'Amida, au pied de la citadelle, jaillit une source

abondante d'eau potable mais qui, dans les grandes chaleurs, devient quelquefois méphitique ». Le caractère exceptionnel des ressources aquifères du site est aussi révélé par cette anecdote : selon Josué le Stylite (LXIII, 76), le roi utilisa lui-même des bains publics à Amida, des thermes, ce dont il fut à ce point satisfait qu'il en diffusât ensuite, au témoignage du moine de Zuqnin, le modèle dans tout son empire (Trombley, 2000). Nous avons donc pris en compte les trajets de l'eau dans la ville et les axes qu'ils dessinent. Toute cette eau qui jaillit des sources de la ville, ou qui est tirée de ses puits, est ensuite évacuée vers les jardins de l'Hevsel où sa force motrice animait des moulins et permettait d'irriguer les terrains situés en contrebas de la muraille. Dans le secteur de la Keci Burçu on peut observer un ouvrage exceptionnel pris dans la muraille antique et qui en est contemporain, destiné à l'évacuation des eaux. A ce point se trouvent aussi des moulins dont les ancêtres sont sans doute ceux évoqués par Ammien Marcellin (XVIII, 8, 11), quand pris entre les feux perse et romain, il relate les difficultés que lui causa une rangée de moulins mise sur sa route alors qu'il tentait de rejoindre la ville « (...) j'essayais alors en courant à perdre haleine de gagner la ville qui, du côté où nous étions assaillis, est située sur un escarpement et n'est accessible que par une seule montée très étroite, fortement resserrée, où (de surcroît) les collines étaient entaillées par des moulins construits sur ces chemins étriqués » (Assénat, Pérez, 2015). Après quoi l'eau servait à l'irrigation des jardins, réserve alimentaire de la ville, puis rejoignait le Tigre.

Comme à Nakatsu ces combinaisons donnent au paysage l'aspect particulier qui est le sien.

Les falaises basaltiques qui surplombent la vallée et les jardins ont également constitué un élément important de la structuration du paysage. Profitant de leur présence les constructeurs de la muraille les ont utilisées à la fois pour surélever naturellement les défenses de la ville et pour en extraire le matériau nécessaire à l'édifice. (Assénat, Bessac, 2015). Proviennent aussi des jardins la matière première utilisée pour la composition des mortiers, sables et graviers notamment (Bromblet, 2015), comme probablement l'argile ayant servi à la confection des tuiles.

Les voies de communication ont également contribué d'une manière significative à la structuration du paysage. Le plan actuel d'Amida/Diyarbakır est hérité de l'Antiquité : cardo et decumanus offrent l'aspect classique des fondations quadripartites décrites par les traités gromatiques (Assénat, Pérez, 2016). En réalité ces axes représentent deux plans d'urbanisme successifs. Deux portes ouvertes sur la vallée du Tigre permettaient aux voyageurs et marchands d'accéder au centre de la ville, puis au-delà aux montagnes du Taurus. Les anciens ports fluviaux ne sont malheureusement pas connus. Avant la fondation de la ville romaine Amida était déjà située sur la route royale des Perses. Le pont sur le Tigre, plusieurs fois reconstruit, témoigne également de l'importance des échanges terrestres (Assénat, 2015b). Nous voyons ainsi qu'à Amida l'organisation civique et vivrière

de la société trouve une expression topographique intégrée.

Au-delà de ces recherches, les autorités locales ont également porté, avec le dossier, un projet de société.

### Un projet de société

Les décisions de gestion qui devaient accompagner le site vers une meilleure protection capable de consolider, ou de restaurer, les dynamiques sociaux-économiques qui avaient permis au « paysage culturel » de se construire, mais aussi de traverser les siècles, constituaient un vrai projet de société tourné vers le futur. Ce projet a été mis en œuvre par l'ensemble des acteurs publics et par les organisations de la société civile, comme les mouvements écologiques ou encore les chambres de métiers, comme la chambre des architectes de Diyarbakır, qui ont joué un rôle participatif important.

Le projet demandait de gros investissements qui sont listés dans le dossier de candidature. Il ne s'agissait de rien moins que d'assainir la zone actuellement très polluée des jardins de l'Hevsel. Pour cela il fallait veiller à dépolluer l'eau du Tigre mais aussi à acheminer vers les jardins l'eau des sources ou bien l'eau de pluie et d'éliminer l'usage des eaux usées. Le projet prévoyait également de supprimer les pesticides, d'endiguer les rejets de pollution dans le fleuve, de maîtriser l'exploitation du sable. Il s'agissait également de créer des débouchés pour les produits de l'Hevsel, d'aider les femmes à s'établir en ouvrant des lieux d'accueil du public (restaurants, cafés). Ce projet écologique visait aussi à protéger les espèces endémiques du Karacadağ (Soyukaya, 2015, Assénat, 2018).

### Les critères

A Diyarbakır les porteurs du dossier ont longtemps hésité sur les critères. Finalement l'État partie a choisi de soutenir les critères II, IV et V.

S'agissant du critère ii l'État partie le justifiait au motif que « l'emplacement du bien proposé pour inscription – à la croisée des routes reliant la Mésopotamie à l'Anatolie puis aux pays du Nord – lui a permis de devenir le point de rencontre et de fusion des cultures de cette région. Diyarbakır a été une capitale militaire et/ou culturelle pour différentes civilisations à différentes époques, sur ce site stratégique entre l'Occident et l'Orient. Les cultures et les croyances de ces différentes civilisations se sont influencées mutuellement, ce dont témoignent aujourd'hui les traces laissées dans les éléments matériels et immatériels du paysage culturel. L'État partie suggère aussi que les progrès et interactions artistiques qui eurent lieu au fil du temps sont visibles dans les diverses inscriptions découvertes sur les tours et les portes ».

L'ICOMOS n'a pas retenu ce critère.

S'agissant du critère iv, l'État partie le justifiait au motif que « la forteresse de Diyarbakır, avec ses structures, inscriptions et portes – est un exemple beau et fort du point de vue de l'architecture, des techniques de construction, de la maçonnerie et des inscriptions / décorations au travers de nombreuses périodes historiques, depuis l'époque romaine jusqu'à nos jours ».

L'ICOMOS a retenu ce critère

S'agissant du critère v, l'État partie le justifiait au motif que « les éléments naturels les plus importants qui ont motivé l'implantation de la forteresse de Diyarbakır à cet endroit sont le cône volcanique en forme de bouclier du Karacadağ et le plateau basaltique, les jardins de l'Hevsel et le Tigre. Ces éléments ont permis la création et le développement du bien proposé pour inscription à travers l'histoire et fondent l'importance de la forteresse et de son paysage culturel environnant dans le contexte de la Mésopotamie ».

L'ICOMOS n'a pas retenu ce critère.

La VUE (valeur universelle exceptionnelle) du site classé le 4 juillet 2015 n'a donc été finalement reconnue par l'ICOMOS qu'au regard du critère iv. Les observateurs ont bien noté que le développement de la candidature dans la catégorie « paysage culturel » avait permis de faire accepter à l'ensemble des partenaires une protection du site étendue aux jardins de l'Hevsel et à la vallée du Tigre (Boucly, 2019) incluant leur assainissement et la mise en place d'une agriculture écologique assortie d'une consolidation de l'emploi des femmes.

## Conclusion

A Diyarbakır le classement du site comme « paysage culturel » s'est appuyé sur une valeur universelle exceptionnelle mais également sur un projet de société. L'élaboration de ce dossier a inclus de nombreux acteurs de la société civile et a insufflé à la ville une dynamique soutenant les initiatives écologiques et sociales. Ces perspectives enrichissantes peuvent bien sûr s'offrir au Jôri de Nakatsu qui peut, peut-être, porter l'enjeu d'un retour à une riziculture naturelle et celui d'un endiguement de l'urbanisation des terres rizicoles.

Visionnage du film. Du riz et des canards





## Bibliographie

ASSÉNAT, M., (2015a), Les Jardins de l'Hevsel à Amida/Diyarbakır. Études et Réhabilitation de jardins mésopotamiens Patrimoines au Présent, Revue de l'IFEA. (collectif dir. M. Assénat) Nouvelle édition [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <https://books.openedition.org/ifeagd/1226>

ASSÉNAT, M., (2015b), « Les jardins de l'Hevsel : éléments de structuration du paysage », in, Assénat, Martine (dir.). L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens. Nouvelle édition [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <http://books.openedition.org/ifeagd/1226>.

ASSÉNAT, M. ; BESSAC, J.-C., (2015), « Observations sur les carrières de basalte des jardins de l'Hevsel à Diyarbakır : la muraille au miroir » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <http://books.openedition.org/ifeagd/2335>.

ASSÉNAT, M. ; PÉREZ, A., (2015), « Amida 5. Localisation et chronologie des moulins hydrauliques d'Amida. A propos d'Ammien Marcellin XVIII, 8, 11 », *Anatolia Antiqua*, XXII.

ASSÉNAT, M., (2018), Les jardins de l'Hevsel, paradis intranquilles. Patrimoines au Présent, Revue de l'IFEA. (collectif dir. M. Assénat) Nouvelle édition [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <http://books.openedition.org/ifeagd/2252>.

ASSÉNAT, M. ; PÉREZ, A., (2016), « Topographie antique d'Amida IIIe-Ve s. d'après les sources littéraires », Colloque sur les villes byzantines, 9-10 novembre, Institut néerlandais de Turquie et Institut Allemand d'Archéologie (DAI) Istanbul, in, *New Cities in late Antiquity, Documents and Archaeology*, ed E. Rizos, Bibliothèque de l'Antiquité Tardive, 35, p. 57-68.

BOUCLY, J., (2019), La fabrique nationale du patrimoine mondial, Une étude politique de l'action publique patrimoniale en Turquie et à Diyarbakır. Thèse de doctorat (inédite).

BROMBLET, P., (2015), « Description des dégradations de la pierre de l'enceinte fortifiée de la vieille cité de Diyarbakır » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation

de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <<http://books.openedition.org/ifeagd/1256>>.

IINUMA, K., (2017, 2018, 2019), Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre III, Comparaison entre le Japon et l'Antiquité romaine, Presses Universitaires de Beppu, 2018, publication dans Beppu university report of research good practice Le Sanctuaire, la Voie et le Cadastre III, Presses Universitaires de Beppu, 2018, publication dans Beppu university report of research good practice.

KARADOĞAN, S. ; YILDIRIM, A. (2015), « Geomorphological Setting and Tectonic Context of the Tigris Valley in the Diyarbakır Region » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <<http://books.openedition.org/ifeagd/1233>>.

KUZUCUOĞLU, C. ; KARADOĞAN, S. (2015), « The Hevsel Gardens: archives of human activities and of the past and present evolution of the River Tigris at Diyarbakır » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <<http://books.openedition.org/ifeagd/1230>>.

PÉREZ, A., (2015), « Aşşurnaşirpal II, l'Éden et les jardins de l'Hevsel » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <<http://books.openedition.org/ifeagd/1242>>.

PÉREZ, A. (2019), La voie, le cadastre et le sanctuaire. Étude comparée des paysages antiques du Japon et de l'Occident romain, (collectif dir. A. Pérez), PUM.

SABBAH, G. ; FONTAINE, J. (1970), Ammien Marcellin, Histoires, livres XVIII- XIX éd. Trad., Paris CUF.

SOYUKAYA, N., (2015), « Diyarbakır Kalesi ve Hevsel Bahçeleri Kültürel Peyzajı Yönetim Planı » In : L'Hevsel à Amida-Diyarbakır : Études et réhabilitation de jardins mésopotamiens [en ligne]. Istanbul : Institut français d'études anatoliennes, Disponible sur Internet : <<http://books.openedition.org/ifeagd/1248>>.

TROMBLEY, F. R., (2000), Josué le Stylite, Chronique, trad., Watt J. W. Liverpool.



([http://www.tertullian.org/fathers/joshua\\_the\\_stylite\\_02\\_trans.htm](http://www.tertullian.org/fathers/joshua_the_stylite_02_trans.htm))[https://archive.org/stream/ChroniqueDeJosueLeStyliteEcritV/Chronique\\_de\\_Josue\\_le\\_Stylite](https://archive.org/stream/ChroniqueDeJosueLeStyliteEcritV/Chronique_de_Josue_le_Stylite)

#### Filmographie

Takao Furuno : des canards dans les rizières, Vic Pelletier, Lato Sensu Productions, Artisans du changement ; <https://www.dailymotion.com/video/x2twlzb>



## 中津条里およびディヤルバクル（アミダ<sup>1</sup>）の城塞とヘヴセル庭園：

### 二つの文化的景観、二つの歴史、二つのプロジェクトについて

マルティーン・アセナ（モンペリエ第三大学）

坂井 利佐子 訳（別府大学）

戦争に直面し、「ディヤルバクル城塞とヘヴセル庭園の文化的景観」の遺跡の保護のためになされた約束は、人類の利益とその文化とは無縁の利害に抵抗できなかった。2015年7月のユネスコの世界遺産登録後、トルコ政府とクルド労働者党（PKK）の武力紛争は、事実、古代都市の一部を破壊するに至ったのであるから。しかしながら私たちはここで、候補に向けての積極的な取り組みに立ち戻り、なぜディヤルバクルに「文化的景観」のカテゴリーがプロジェクトの関与者たちによって選ばれ、ユネスコによって採択されたのか、そしてなぜこの選択が、方法の観点から、とりわけ調査資料から引き起こされる共同体のプロジェクトに関して、中津条里にも適応され得るかを示したいと思う。ユネスコはディヤルバクルの登録には世界遺産の登録基準(iv)<sup>2</sup>のみを採用したが、中津条里に関する登録基準の選択についてはより幅広く、他の基準も含み得るであろう。ここでは、これら二つの遺跡を比較して、いくつかの要素を示すひとつの構想を提案したい。

#### 文化的景観に関するユネスコの専門用語と中津条里の場合

1992年から、世界遺産条約に文化的景観を承認し保護する条項が盛り込まれ、第1条に規定された。「文化遺産」として認められるのは、「記念(工作)物」「独立し又は連続した建造物の群」および「遺跡 (site) (人工の所産 (自然と結合したものを含む。) 及び考古学的遺跡を含む区域であって、歴史上、芸術上、民俗学上又は人類学上顕著な普遍的価値を有するもの)」である<sup>3</sup>。中津条里の場合は、「遺跡 (site)」の規定に相当する。この条項が盛り込まれて以来、多くの国が世界遺産の登録に向けてこのカテゴリーを活用した。例えば、中国、ドイツ、フランス、イタリア、イギリス（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）は登録多数国である。日本は、23件の世界遺産登録のうち、2件が「文化的景観」である。すなわち、「紀伊山地の霊場と参詣道」と「石見銀山遺跡とその文化的景観」である<sup>4</sup>。

ユネスコにおける文化的景観は「自然環境の制約および／あるいは好条件のもと、そして、継続する社会的、経済的、文化的な内外の影響力のもとで、人間社会と人間の居住地の変遷を例証するものである。」<sup>5</sup>

<sup>1</sup> ディヤルバクルはローマ帝国時代にはアミダ (Amida) と呼ばれた。

<sup>2</sup> 「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。」

<sup>3</sup> 文化遺産 (世界遺産)、出典：『ウィキペディア』[[https://ja.wikipedia.org/wiki/文化遺産\\_\(世界遺産\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/文化遺産_(世界遺産))]を参照。

<sup>4</sup> 「紀伊山地の霊場と参詣道」は2004年に登録、「石見銀山遺跡とその文化的景観」は2007年に登録された。

<sup>5</sup> 「世界遺産の推薦・登録に関連する規定(仮訳)」を参照。「文化的景観は、文化的資産であって、条約第1条のいう「自

中津条里は、ユネスコの規定における次の方針を満たしている。

「文化的景観は、自然との独自の精神的な関わりと同様に、景観を取り巻く自然環境の特質と限界を考慮した、土地の持続可能な活用の独自の技術をしばしば反映するものである。」

条里制度は8世紀に行われた。それは、同時に社会的そして政治的な制度（奈良時代）であり、精神的な（街道、寺社、宗教行列）そして食糧生産（稲作）の制度である。

「文化的景観の保護は、景観の自然の価値を維持または改善しつつ、土地の持続可能な活用と発展のための最新の技術に寄与し得る。」

条里の保全には、地域の決定機関が都市化中止の正当性を認識することが必要であろう。



「土地活用の伝統的な形態の恒久的な存続は、世界の多くの地域における生物多様性を支える。伝統的な文化的景観の保護は、したがって生物多様性の維持に有益である。」

条里の保全は、農業従事者が自らの土地を維持することおよび動植物相（小領域の魚と植物の種）の保護に有利に作用するであろう。

ユネスコは、文化的景観をいくつかのカテゴリーに分類した。私の考えでは、条里は第二のカテゴリーに該当する。それは次のように規定される。「本質的に景観は変化する。最初は社会的、経済的、行政の、および／あるいは宗教的な求めから生じており、関連づけられ、そして自然環境に応じて今日の形状に至った。こうした景観は、その形状と構成において発展の過程を反映している。」；さらに次の項では、「生きた景観とは、伝統的な生活様式に密接に

---

然と人間との共同作品」に相当するものである。人間社会又は人間の居住地が、自然環境による物理的制約のなかで、社会的、経済的、文化的な内外の力に継続的に影響されながら、どのような進化をたどってきたのかを例証するものである。」

[[http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/sekaitokubetsu/01/pdf/sanko\\_2\\_2.pdf#search=%27世界遺産の推薦・登録に関連する規定%28仮訳%29%27](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunkazai/sekaitokubetsu/01/pdf/sanko_2_2.pdf#search=%27世界遺産の推薦・登録に関連する規定%28仮訳%29%27)]

関与した現代の共同体において、今日の社会的役割を維持し、発展の過程が継続している景観である。同時にそれは時間の経過による変化の明白な証拠を示す。」と規定される。

条里は空間を整理した。：それは、中国から受け継いだ法令による政治および行政の制度における土地に関する表現形態である。；それは、権力行使の明白な枠組みである。；そこでは、同時に経済（収穫、すなわち農業生産）と地域の神道の神々（八幡）、同様に天皇の神性に結び付けられた儀式がとり行われる。時の経過とともに進化しながらも（農業水利の慣行、宗教行列の実施、および寺社の儀式の再興）、それは生きた歴史的景観として存続する。

## 登録基準



登録実現のための基準は決定的である。私は、ユネスコの 10 項目の基準のうち次のものは検討されるべきだと思う。

登録基準 (ii) : 「建築、科学技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展に重要な影響を与えた、ある期間にわたる価値観の交流又はある文化圏内での価値観の交流を示すものである。」<sup>6</sup>

遣隋使と遣唐使は、数百年にわたり中国から何よりもまずあらゆる技術や制度を輸入した。同様に、日本人は韓国から水利技術者と測量士を呼び寄せ、「条里」の実施を託した。そして、8 世紀末以降、日本は自国の殻に閉じこもるようになり始める。

登録基準 (iii) : 「現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在(少なくとも希有な存在)である。」<sup>7</sup>

条里は同時に、消滅した文明の希有な証拠である。なぜなら、初期の本来の機能は 7 世紀と 8 世紀の間、すなわち奈良時代の数十年しか持続しなかったからである。その意味では、

<sup>6</sup> 世界遺産の登録基準 [https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/]

<sup>7</sup> 世界遺産の登録基準 [https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/]



古代日本社会の数少ない痕跡のひとつである。その後間もなく条里は再活用され、中世の「荘園（貴族や寺社の土地）」において発展し、その形態を永続させた。（ただしこの登録基準(iii)は同(iv)の中にも見いだされる。）

登録基準 (iv):「歴史上の重要な段階を物語る建築物、その集合体、科学技術の集合体、あるいは景観を代表する顕著な見本である。」<sup>8</sup>

条里は、奈良時代の制度の顕著な実例である。条里は7世紀の日本における権力の創設が地方で実現されたことに関連し、寺社の機能、米の収穫の組織化、区画毎に灌漑するための歴史的に重要な水利システムの活用、条里そのもの（格子状に編成された稲作風景）、その地名、崇高な勅使街道とそれに沿って位置する寺社、そうした場所に結びついた慣習、これらの要素間の関連付けの生きた記憶を持ち続けている。社に加えて、条里は、縁に（聖なる木）楠が植えられた聖なる池と聖なる森（鎮守の森）を擁する。

登録基準 (v):「あるひとつの文化(または複数の文化)を特徴づけるような伝統的居住形態若しくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。又は、人類と環境とのふれあいを代表する顕著な見本である(特に不可逆的な変化によりその存続が危ぶまれているもの)。」<sup>9</sup>

条里は、古代そして中世の、いずれにせよ伝統的な日本社会の、経済、政治、宗教の力学と周囲の自然環境との間の調和の卓越した地理学の表現である。それは、自然、季節の循環、そして水と土地の配分に結びついた信仰の寄り集まる場所である。条里はかつて奈良時代に普及し、今日では珍しくなっており、中津の沖代平野に保存されているものは例外的である。

登録基準 (vi):「顕著な普遍的価値を有する出来事(行事)、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連がある(この基準は他の基準とあわせて用いられることが望ましい)。」<sup>10</sup>

数多くの祭事と行幸が今もおこなわれている。例えば、八幡神信仰に捧げられた宇佐神宮は、8世紀以来天皇から特別な恩恵を受けていた。まさしく日本の天皇の権威の成り立ちと定義にも関係しているからである。宇佐神宮は日本全国に40,000社ある八幡宮の総本社であり、地域の水利技術と条里の水利組織に関連する祭事と伝承の枠組みである。例えば、中津条里そのものと、同じく八幡鶴市神社の大井手堰に関連する伝統、緒方川越祭り、八幡鶴市神社の花傘鉾神事、(旧暦の)10月に田染三社八幡宮が行う祭礼の伝統がある。(Iinuma, 2016, 2018, 2019; Pérez, 2020)

登録される遺産は、「真正性」と「完全性」の基準にも応えなければならない<sup>11</sup>。

その点で(まさに)適用されるのは、「オーセンティシティ(「真正性」)に関する奈良ドキ

<sup>8</sup> 世界遺産の登録基準 [https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/]

<sup>9</sup> 世界遺産の登録基準 [https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/]

<sup>10</sup> 世界遺産の登録基準 [https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/]

<sup>11</sup> 「ある資産が顕著な普遍的価値を有するとみなされるには、当該資産が「完全性」及び「真正性」の条件についても満たしている必要がある。この「完全性」とは、世界遺産の顕著な普遍的価値を表すものの全体が残されていることをいい、「真正性」とは、文化遺産の形状、材料、材質などがオリジナルな状態を維持していることをいう。なお、完全性については、文化遺産及び自然遺産ともに条件を満たすことが求められているが、真正性については、文化遺産のみに求められる。」(1) 世界文化遺産の概要等、ウ 世界遺産への登録基準、(イ) 完全性、真正性)

[https://www.soumu.go.jp/main\_content/000393813.pdf#search=%27世界遺産の推薦・登録に関連する規定%28仮訳%29%27]



ュメント<sup>12</sup>」である。「条里」および境界を画する設備の「真正性」は疑いない。「完全性」については、都市化された区域をいかに提示するかを心得なければならない。

遺産は、その普遍的な価値を証明するべく、他の登録遺跡に比肩し得るものでなければならない。

## 行政関連の資料

ユネスコに関する資料において、管理すべき案件の大部分は当然行政の所管庁に帰属し、そこから申請が出される。ディヤルバクルでは、申請は、関係資料の作成を手配した市の役所から出された。しかしいかなる場合でも、(世界遺産条約の) 締約国だけが、つまり本件では日本が、正式に候補として届出ができる。それゆえ重要なことは、最初に、管轄権を持つ地域の管理機関、つまり、遺跡の管理における権限を持ち、保存のための方策や申請の利益になるような方策を講じられる機関を説得しなければならない。

複数の研究者が、遺跡の歴史的に高い価値とその重要性を際立たせることは、作業の大切な部分でもある。

別府大学とモンペリエ大学は、とりわけ寺社、官道、条里の内部構造について調査し、報告書を刊行した。そして、このシステムが数世紀の間に中津・宇佐地域の社会制度に関する土台を構築したことが明らかにされた。(Iinuma, 2016, 2017, 2018; Pérez, 2019)

「ディヤルバクル城塞とヘヴセル庭園の文化的景観」の登録：中津の条里との比較点



<sup>12</sup> Document de NARA sur l'authenticité (1994) / オーセンティシティに関する奈良ドキュメント (世界文化遺産奈良コンファレンス、日本、奈良、1994年11月)



## 文化的景観

ディヤルバクルでは、ティグリス川流域および都市と川の上に位置するヘヴセル庭園の肥沃地帯の存在が文化的景観のカテゴリーに合致した。川および田園の緩やかに隆起した地形が都市に食糧を供給し、その永続性を確保した。その地理的な位置により都市は拡大し、メソポタミア北部において政治的に重要な役割を演じることを可能にした。見事な城壁が都市の影響力を物語っており、数多くの文化の発展を可能にした。この遺跡を文化的景観にしているのは、肥沃な流域を含む一帯の調和である。

以上の結論は、一連の調査と特にモンペリエで行われた数回の研究会を部分的によりどころとしている。そこでは考古学者と歴史家が次の点を主張した。(Assénat, 2015a; Assénat, 2018)

ティグリス川に臨むアミダは、北部のトロス山脈と南部のシャットウルアラブ川間の交易の必然的な接触地点であった。要塞化した都市はヘヴセル庭園一帯に張り出た玄武岩の台地の端に位置し、城塞の壁はその形状の大部分において、溶岩流によってできた断崖の線にぴったり沿っている。都市のふもとに位置する庭園はひと続きの河岸段丘に段状に広がっている。同様に、カラジャ山からの水で永久的に灌漑された、並外れて肥沃な食糧生産地帯でもあった。

景観の文化的な特徴を説明するにあたり、とりわけ自然環境に関する、および人間の活動による変化に関する研究から、こうした多様な土地における物理的な相互作用を考証し得る要素が考慮された。この点については当然多くの問題が提起されたが、ここで網羅的に取り上げることはできない。

まず、ティグリス川とヘヴセル庭園と都市の間の循環の問題を強調するのは私たちには当を得ているように思えた。歴史考古学者として私たちは、水の経路の影響、人間の移動、そして、とりわけ都市の建設に使われた原材料の運搬に関連した行程を引き合いに出した。

私たちはまず、地質学者と地形学者の協力を得ながら、これらの経路が含まれていた環境



を復元することを試みた。彼らの研究により、庭園が整備された、都市とティグリス川の間  
の段丘が形成されていく段階について情報を得ることができた。(Kuzucuoglu, Karadogan,  
2015; Karadogan, Yildirim, 2015)

私たちは同様に、庭園の起源を知るために原資料を調査した。庭園が最初に出てくるのは、  
新アッシリア王国時代の王アッシュールナツイルパル2世による「アメデュ」の果樹園の破  
壊について言及した紀元前866年の楔形文字の碑文においてである。(Pérez, 2015)

私たちは、水利網および、記述された伝承において、それもアンミアヌス・マルケリヌス  
(XVIII, IX, 1)の時代から重要な位置を占めていた水利施設にも同じく関心を持った。：「(西  
風の神)ゼピュロスの息を受けるアミダは、農耕に向けた肥沃なグマテナ(Gumathène)地  
方に隣接しているが、そこにはよく効く湯治場で知られるアバルネ(Abarné)という町があ  
る。；また、アミダの中央の、城塞のふもとには、飲料可能な水の豊かな水源があるが、非常  
に暑く、時折悪臭が漂う。」遺跡の帯水層資源の稀に見る特徴は、次の逸話によっても明らか  
にされている。：柱頭行者<sup>13</sup>ヨシュア(の年代記)(LXIII, 76)によれば、(ペルシアの)王自  
身がアミダの公衆浴場を利用した。このズクーニン男子修道院の修道士の証言によれば、王  
はあまりに満足して、後にこの(古代ローマの)共同浴場を広めるほどで、それは彼の全領土  
において(公衆浴場の)モデルとなった。(Trombley, 2000)私たちは都市の水の経路とそれ  
らが描く軸線を考慮に入れた。都市の水源から湧き出る水や井戸から引いた水はすべて、ヘ  
ヴセル庭園の方へと排水されるが、その水が動力となり水車を動かし、城壁の下の方の土地  
を灌漑することを可能にした。Keci Burçu地区では、古代の城壁のなかに作られた、同時代  
の、排水を目的とした、類まれな設備が認められる。そこには水車もあるが、おそらくその原  
型となったものについて、アンミアヌス・マルケリヌス(XVIII, 8, 11)(の書いた『歴史』)  
は言及している。ペルシアとローマの戦火の間に不意をくらった時に、彼が町に戻ろうと試  
みた際の、行く道に並んだ白石の列によって生じた困難さを詳しく記している。「(…)当時  
私は息が切れるほど走って、私たちが襲撃された場所から近い町に辿り着こうとした。急斜  
面に位置し、非常に幅の狭い、一本の上り坂を行くしか到達できない町である。(そのうえ)  
坂のある丘陵はその狭い上り坂にしつらえられた(複数の)白石により溝が掘られたよう  
になっていた。」(Assénat, Pérez, 2015)のちに水は庭園の灌漑に利用され、都市に水を供給し、  
ティグリス川に合流していた。

中津と同様、その調和は独自の様相を景観にもたらしている。

流域と庭園の上に切り立つ玄武岩の崖も景観の構成の重要な要素となっている。城壁の建  
造者たちは崖をうまく利用して、都市の防御施設を無理せず高くすると同時に、建造物に  
必要な資材を取り出すのに使った。(Assénat, Bessac, 2015)同じく、モルタルの組成に使わ  
れた原材料と砂と特に砂利は庭園から来ている。(Bromblet, 2015)おそらく瓦の製造に使わ  
れた粘土も同様である。

交通路も同じく有意義に景観の構造化に寄与した。アミダあるいはディヤルバクルの現在  
の都市計画は、古代から受け継がれたものである。：南北と東西の主要軸は、土地測量概論に

---

<sup>13</sup> ちゅうとうぎょうじゃ【柱頭行者 stylite】柱の上で単独で修行するキリスト教の修道士。5世紀から10世紀にかけ  
て、シリア、メソポタミア、エジプト、ギリシアなどに現れた。(出典 株式会社平凡社世界大百科事典 第2版)

記載された四つの要素からなる土台の古典的な様相を呈している。(Assénat, Pérez, 2016) 実際これらの軸線は、連続する二つの都市計画を代表する例である。ティグリス川流域に開かれた二つの門により、旅人や商人たちが都市の中心に、そしてトロス山脈の向こうに行くことができた。残念ながら河川のかつての港はあまり知られていない。古代ローマの都市が建設される以前にすでにアミダはペルシアの幹線道路（「王の道」）沿いに位置していた。ティグリス川の橋は何度も架け替えられており、陸上交易の重要性を物語っている。(Assénat, 2015b) このようにアミダでは、共同体の市民組織と食糧生産の組織化は、ひとつの統合された地形表現を見いだしたことがわかる。

こうした研究とは別に、地域の関係機関も調査資料を用いて共同体のプロジェクトを担った。

### 共同体のプロジェクト

遺跡を、補強あるいは修復することができるより優れた保護へと伴わなければならない管理運営の決定や、「文化的景観」が数世紀にわたって形作られることを可能にした社会経済の力学が、未来に向けて有効な共同体のプロジェクトを形成していた。このプロジェクトは、公共団体の関係者全体、および、環境保護運動あるいはディヤルバクルの建築家組合のような手工業者組合といった市民社会の団体とによって行われた。彼らは重要な運営参加の役割を担った。

プロジェクトは、世界遺産候補のリストに載るよう、多大な投資を必要とした。まさしくヘヴセル庭園の汚染された一帯の衛生状態を改善することが重要であるからだ。そのために、ティグリス川の水の汚染を浄化することだけでなく、水源の水あるいは雨水を庭園へと導き、汚水の使用を避けることにも留意する必要があった。プロジェクトは、殺虫剤の使用禁止、川への汚染物質廃棄の阻止、砂の利用の抑制も予定していた。ヘヴセル庭園の特産品の販路を作ることや、女性たちがレストランやカフェなど人々を受け入れる場所を開業して身を落ちつけられるように支援することも重要であった。この環境保護のプロジェクトは、カラジャ山固有の種を保護することも目的としていた。

### 登録基準

ディヤルバクルでは、関係者たちは登録基準について長い間躊躇した。最終的に締約国は登録基準 II、IV と V を支持することを選択した。

登録基準 (ii) に関しては、締約国はその支持理由を次のように説明した。「登録に推薦された遺産が位置するのは、メソポタミアとアナトリアおよび北部地域を結ぶ街道が交差する場所で、この地方の文化の遭遇と融合の地点であった。ディヤルバクルは、西洋と東洋の間にある戦略的な拠点として、様々な時代の様々な文明の軍事的および／あるいは文化的中心都市であった。こうした異なる文明の文化と宗教は相互に影響し合ったが、今日では文化的景観の有形無形の要素の中にその痕跡をとどめている。締約国は同様に、時代時代で芸術的な進歩と相互作用が起きたことが、(複数の)塔と門で発見された様々な碑文において明白であることを示唆した。」

イコモス（国際記念物遺跡会議）はこの基準を採用しなかった。

登録基準（iv）に関しては、締約国はその支持理由を次のように説明した。「ディヤルバクル城塞は、その構造と碑文と門により、建築、建造技術、石積み工事、そして古代ローマ時代から現代に至るまで、歴史的に多くの時代を通して刻まれた碑文や装飾、これらの観点から見事で頑丈な作例である。」

イコモスはこの基準を採用した。

登録基準（v）に関しては、締約国はその支持理由を次のように説明した。「この場所にディヤルバクル城塞を配置した理由となった最も重要な自然の要素は、カラジャ山の楕状地の火山円錐丘と玄武岩の台地、ヘヴセル庭園とティグリス川である。これらの要素は、登録に推薦された遺産の創造と発展を歴史を通して可能にし、メソポタミアという背景の下で、城塞とその周囲の文化的景観の重要性の根拠となっている。」

イコモスはこの基準を採用しなかった。

遺跡は2015年7月4日に世界遺産登録されたが、結局イコモスは登録基準（iv）に関してしかその「顕著な普遍的価値」を認めなかった。「文化的景観」の категорияにおいて世界遺産候補が展開したことで、その衛生設備と女性の雇用の安定化を伴ったエコロジー農業の実施を含んだ、ヘヴセル庭園とティグリス川流域まで広げた遺跡の保護（Boucly, 2019）を全パートナーに承諾させることができたことをオブザーバーは皆評価した。

おわりに

ディヤルバクルでは、遺跡の「文化的景観」としての世界遺産登録は、「顕著な普遍的価値」と同様に、共同体のプロジェクトにも基づいていた。この一件を練り上げることで、市民社会の多くの関与者たちを巻き込み、環境保護的かつ社会的な自主性を支える活力を都市に与えた。このような地域環境を豊かにする見地は当然中津の条里に提案され得るが、おそらく自然農法の稲作に立ち戻るといった問題点と稲作用地の都市開発の抑止といった問題点が生じ得るだろう。

※ 参考資料：動画「米と鴨」（古野隆雄の合鴨水稲同時作）

Takao Furuno : des canards dans les rizières.

[<https://www.youtube.com/watch?v=pqpEg45fp4I>]







# 古代の直進性と方位——聖域の成立時期をめぐって——

山本 晴樹（別府大学）

## はじめに

これまで、繰り返し確認されてきたことですが、古代ローマ世界において聖域・街道・地割の建設は時の政治権力が主導して行ってきました。その際、とりわけ街道や地割はできるだけ直線を保つように設計され建設されました。ここに「古代の直進性」という特色が現れています。従ってまた聖域・街道・地割のもつ方位もこのことに大きく影響されています。とりわけ聖域の成立時期を考える場合、この「直進性と方位」という観点は重要な意味をもちます。そこで、今回は古代ローマと日本において聖域や街道や地割が一体的に捉えられうると思われる地域を比較し、そのうえで古代における「直進性と方位」がとりわけ聖域の成立時期にとってどのような意味を持つのかということについて考えてみたいと思います。

## I. 古代ローマの場合

それではまず古代ローマの聖域・街道・地割の「直進性と方位」についてみてみましょう。対象となるのはローマの属州ナルボネンシスの首都ナルボンヌです（図1）。ナルボネンシスは現在のフランス南部地方をあらわす古代名称です。この土地に前2世紀末、イタリア外では初めてのローマ市民による海外植民市ナルボンヌが建設されます。

ペレス（1995, 2016）氏によればこの紀元前2世紀末、ローマ市民植民市として建設されるナルボンヌは都市中心部にまず守護神を祀る神殿を擁する聖域（都市聖域）が建設され、そこから南南西に直進する街路が整備されます。そしてその街路は都市郊外の農村部へと直進し、そこにおける地割の軸線を構成しているというのです（図2）。因みにその都市聖域から発する街路は現在「ドロワット通り（rue Droite）」と呼ばれていますが、「真っすぐな通り」という意味です（図3）。近年、この通りの一部は発掘・展示されていて、当時の姿を見ることが出来ます（図4）。この場合、ローマ植民市ナルボンヌを建設したのはローマ共和政政府ですので、ローマ当局が聖域の方位および街道と地割の直進性を決定しているということになります。

さらにペレス（1995）氏によれば、ローマ帝政期に属州首都としてのナルボンヌには属州全体の皇帝礼拝のための聖域（属州聖域）が都市の郊外に整備されました（図5）。しかし、この属州聖域がいつ建設されたのか不明でした。このことに関してペレス氏は、属州聖域の方位がその東側側面にそって東南に直進する街道の方位に規制されていること（図6）、またその街道は当時の皇帝によって整備された地割の軸線の一つを構成していることに注目します。ペレス氏はこの地割はフラウィウス期（紀元後1世紀後半）に整備されたとみなしています。すなわち、属州聖域はフラウィウス期以前に建設されることはありえないということ

になります。この場合、まさしく皇帝礼拝の対象であるローマ皇帝が属州聖域の方位と街道・地割の直進性を決定したのです(図7)。またこれは属州ナルボネンシス全体の皇帝礼拝の開始の時期を指し示すものでもありました。

## II. 日本の場合

次に、ペレス氏によるナルボヌの属州聖域および属州皇帝礼拝の成立時期に関する研究成果を踏まえながら、日本の事例をここ大分の宇佐地方を対象として検討してみたいと思います。

飯沼賢司氏は1991年に出された報告書『宇佐大路』(大分県教育委員会)において、中津条里の南限線と宇佐八幡宮へ至る宇佐大路・西参道(図8)とが同一方位で同一線上に並んでいることを指摘し、両者を繋ぐ古代官道の存在を推定しています(図9)。この指摘は、これまであまり相互に関連づけて考察されることのなかった中津条里や宇佐条里と古代官道および宇佐八幡宮を地割・街道・聖域として一体的に捉えるものであり、まさしくペレス氏の研究と重なるものでありました。また「古代の直進性」がここ中津・宇佐地方でもみられることを明らかにするものでした。

一方、小柳和宏氏は2018年の報告書『聖域・街道・地割 III』(別府大学)において、飯沼氏が推定した宇佐地方での直進的な古代官道の存在を踏まえつつ、宇佐平野においてその古代官道を南限線として宇佐条里が施行された可能性を指摘しています(図10)。小柳氏の指摘はまさしく中津・宇佐地方における「古代の直進性」の存在の可能性を明らかにしたものとわなければなりません。

さらに小柳氏は、宇佐地方の小字図の丹念な復元とその詳細な分析によって、古代官道の建設のあり方を推定しています。すなわち、宇佐大路周辺地域(図11)における小字図の集積図によれば、小柳氏は宇佐大路の方位は、その北側に位置する地割の方位とは明らかに異なっている事実を指摘します。これらの異なる二つの方位はおのおのの建設時期の相異を示します。小字集成図によれば宇佐大路はその地域の在地勢力によってすでに施行されていたいわゆる「古地割」を裁断する形で直進しています(図12a, b)。とすると、古代官道から派生している宇佐大路は既に存在する古地割を施行した権力よりもさらにそれを上回る強大な権力によって建設された可能性があります。この権力こそ当時の最高権力者すなわち皇帝(天皇)であったのではないのでしょうか。

古代官道から東方向に延長された宇佐大路および西参道の成立時期を更に詳細に見ていくと、それは弥勒寺が宇佐八幡神の神宮寺として宇佐神宮の境内に建立される738(天平10)年以前と思われます。というのも弥勒寺は西参道に方位を規制されているからです。このことは弥勒寺の建立以前に、西参道・宇佐大路およびその延長上にある古代官道が既に整備されていたことを示します。この事実から、日本においても宇佐地方では、聖域(宇佐八幡宮・

弥勒寺)の成立時期が街道(宇佐大路・西参道、古代官道)および地割(宇佐条里・中津条里)の「直進性と方位」を手がかりとして推定されうる可能性があることを示しています。

## 結び (conclusion)

今回のシンポジウムでは、まずペレス氏が南フランス・ナルボンヌにおいて、街道および地割の「直進性と方位」を手がかりに、属州聖域の成立時期を推定したことを確認しました。次にその指摘を踏まえながら、飯沼賢司氏や小柳和宏氏の日本の中津・宇佐地方での聖域・街道・地割を一体的に捉える調査・研究を検討しました。その結果、ここ日本の西南地域でも街道と地割の「直進性と方位」を手がかりとして、聖域の成立時期を推定しうるということ、また、その聖域が成立するにあたっては、時の最高権力者が決定的な役割を果たした可能性があることを明らかにしました。

## (付記)

拙稿の仏訳に関しては、モンペリエ第三(ポール・ヴァレリー)大学のアントワヌ・ペレス准教授の協力を得た。ここに同氏への感謝の意を表したい。

## <参考文献>

- 飯沼(1991): 飯沼賢司「下毛条里と官道」『宇佐大路』大分県教育委員会
- 小柳(2004): 小柳和宏「宇佐町小字集成図」『大分の中世城館 第四集 総論編』大分県教育委員会
- 小柳(2018): 小柳和宏「発掘成果にみる古道と条里」『聖域・街道・地割 III』別府大学
- ゲロー(1981): ミシェル・ゲロー『古代のナルボンヌ』パリ(仏語)
- ペレス(1995): アントワヌ・ペレス『ナルボネンシス西部における古代の地割』パリ(仏語)
- ペレス(2016): アントワヌ・ペレス、山本晴樹訳「ローマ世界におけるケントゥリア地割の政治的・宗教的機能」『聖域・街道・地割』別府大学
- リヴェット(1988): A. L. F. リヴェット『ガリア・ナルボネンシス』ロンドン(英語)

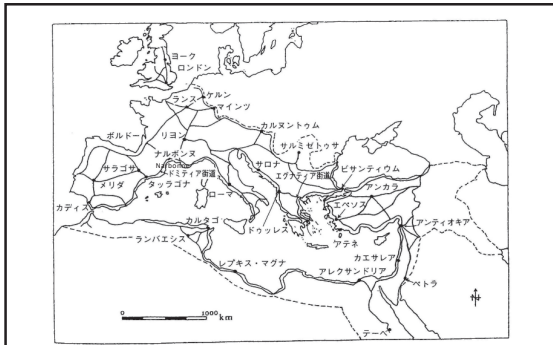


図1. ローマ帝国の街道網(後2世紀初頭)  
Fig.1. Réseaux des routes romaines au début de 2ème s. ap. J.-Ch.

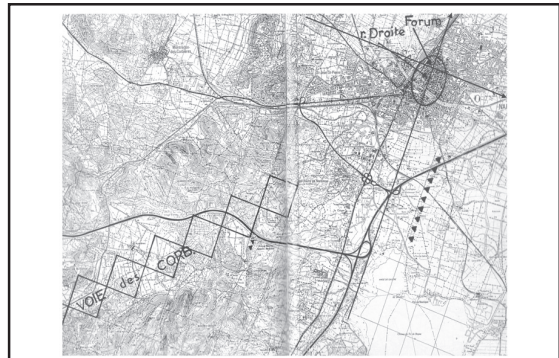


図2. ナルボンの聖域・街道・地割(Pérez 1995)  
Fig.2. Le sanctuaire, la route et le castrum à Narbonne(Pérez 1995)

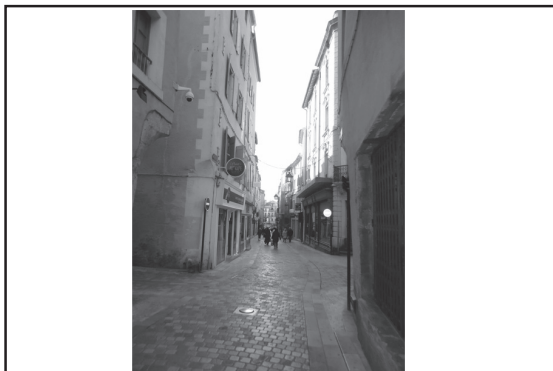


図3. ドロワット通り(ナルボンヌ)  
Fig.3. Rue Droite à Narbonne



図4. ドロワット通りの延長上にあるドミティウス街道の展示遺跡  
Fig.4. L'exposition du site archéologique de Via Domitia à Narbonne

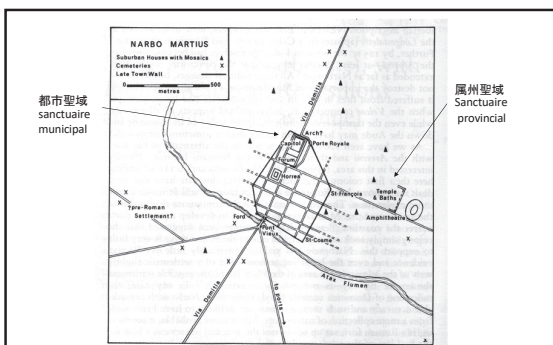


図5 ナルボンの都市聖域と属州聖域(リヴェット 1988)  
Fig.5 Sanctuaire municipale et provincial à Narbonne(Rivet 1988)

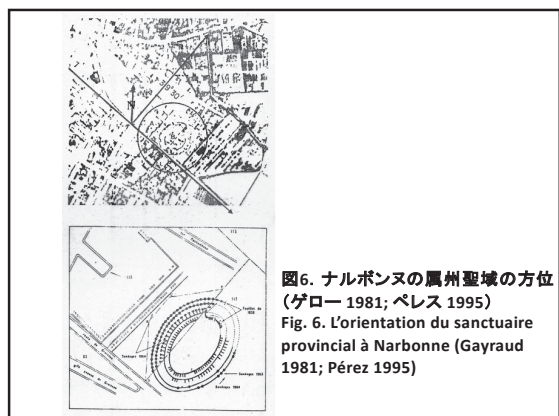


図6. ナルボンの属州聖域の方位  
(ゲロー 1981; ペレス 1995)  
Fig. 6. L'orientation du sanctuaire provincial à Narbonne (Gayraud 1981; Pérez 1995)



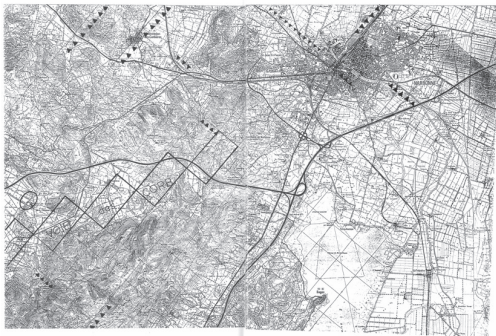


図7. 帝政期ナルボンヌの地割(ペレス 1995)  
Fig.7. La centuriation à Narbonne au temps de l'Empire romain (Pérez 1995)



図8. 勅使街道と古代官道推定線(『宇佐大路』1991年)  
Fig.8. La voie impériale et la ligne conjecturée de la route officielle antique("Usa-ôji" 1991)



図9 宇佐大路(正面突き当りが宇佐八幡宮西参道入口)  
Fig. 9 Usa-ôji et L'entrée de Nishi-sando pour la divinité Hachiman au fond

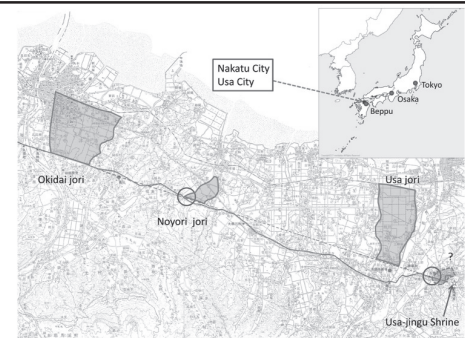


図11. 古代官道推定線上の沖代・野依・宇佐の各条里想定図(小柳 2018)  
Fig.11. Le plan supposé des Jôris de Okidai(Nakatsu), de Noyori et de Usa sur la ligne conjecturée de la route officielle antique (Koyanagi 2018)

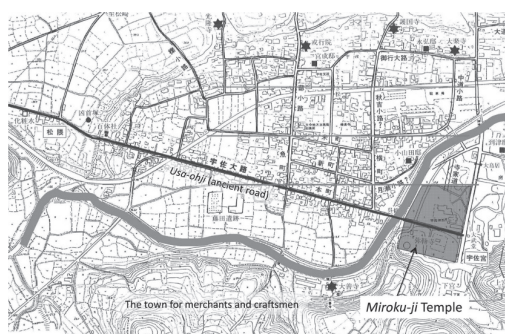


図10. 宇佐大路周辺地図(小柳 2018)  
Fig.10. Le plan aux alentours de Usa-ôji(Koyanagi 2018)



図12a. 宇佐大路周辺小字集成図(小柳 2004)  
Fig.12a. Le plan reueilli des sublocalités aux alentours de Usa-ôji(Koyanagi 2004)





# La rectitude de l'Antiquité et l'orientation :

## autour de la période formative du sanctuaire

YAMAMOTO Haruki (Université de Beppu)

### Préface

Il a été souvent confirmé que, dans le monde romain, l'autorité politique avait pris l'initiative d'aménager, dans une même séquence, le sanctuaire, la route et la centuriation. A ce moment-là, la route et la centuriation furent aménagées de la manière la plus rectiligne possible. C'est cela, la rectitude de l'Antiquité, qui détermina l'orientation du sanctuaire, de la route et de la centuriation. Concernant la période formative du sanctuaire surtout, ces principes de rectitude de l'Antiquité et d'orientation furent déterminants. Maintenant, en comparant, dans la région, l'Antiquité romaine avec celle du Japon, dans lesquelles on peut intégrer synthétiquement le sanctuaire, la route et la centuriation, je voudrais envisager ce que la rectitude de l'Antiquité et l'orientation signifient spécifiquement pour la période formative du sanctuaire.

### I. Le cas de l'Antiquité romaine

D'abord, voyons la rectitude de l'Antiquité et l'orientation à propos du sanctuaire, de la route et de la centuriation dans le monde romain. Notre champ de recherche est Narbonne, capitale provinciale romaine de Narbonnaise qui est l'ancien nom de la région méridionale de France (Fig. 1) Narbonne fut fondée à la fin de II<sup>ème</sup> s. av. J.-Ch. en tant que colonie de citoyens romains, la première colonie en dehors d'Italie.

D'après M. Pérez (1995, 2016) , le sanctuaire municipal pourvu du temple pour le dieu tutélaire fut d'abord construit au cœur de la ville. Ensuite la route (Via Domitia) fut aménagée, partant de ce sanctuaire et allant droit dans la direction sud-sud-ouest vers la campagne suburbaine. Cette route constitua l'un des axes majeurs qui limitèrent la centuriation (Fig. 2). Aujourd'hui, on appelle cette route la "Rue Droite", c'est-à-dire la rue rectiligne (Fig. 3). Récemment, une partie de cette rue fut fouillée et exposée, pour montrer son apparence ancienne (Fig. 4). Dans ce cas-là, c'est le gouvernement de la république romaine qui construisit la colonie romaine de Narbonne. L'autorité romaine décida alors l'orientation du sanctuaire et la rectitude de la route et de la centuriation.

Selon M. Pérez, ensuite, fut aménagée à Narbonne dans la deuxième partie du premier s. ap. J.-Ch. - à l'époque impériale donc -, le sanctuaire provincial où se déroulait la cérémonie du culte impérial (Fig.5). Mais on ne peut à ce jour déterminer précisément sous quel empereur fut construit ce sanctuaire. M. Pérez remarque que la route va droit justement au long du côté du sanctuaire dans la direction sud-est, constituant l'un des axes de la nouvelle centuriation que l'empereur d'alors avait aménagé, et que l'orientation de ce sanctuaire est régie par cette route (Fig. 6). M. Pérez considère que cette centuriation fut aménagée au temps de la période flavienne, dans la deuxième partie du Ier s. ap. J.-Ch. Ce qui revient à dire que le sanctuaire provincial ne put pas être édifié avant cette période-là. Dans ce cas-là, précisément, l'empereur à qui le culte impérial était destiné décida l'orientation du sanctuaire et la rectitude de la route et de la centuriation (Fig. 7). Cela illustre la période formative du culte impérial provincial en Gaule Narbonnaise.

## II. Le cas du Japon

En considérant des études de M. Pérez sur la période formative du sanctuaire provincial et du culte impérial provincial à Narbonne, je voudrais désormais envisager celle de la région de Usa (Oita) comme un exemple comparable au Japon.

M. Kenji Iinuma (1991) signale que l'orientation du plus méridional des axes du Jôri de Nakatsu est la même que laquelle de Usa-ôji et Nishi-sandô (Fig. 8) , parvenant au Sanctuaire Usa, et qu'il se trouve exactement sur la même ligne. De cela, il conjecture qu'il y avait à l'origine la route officielle (kandô) liant les deux axes (Fig. 9). M. Iinuma considère que le Jôri de Nakatsu et d'Usa, la route officielle et le Sanctuaire d'Usa doivent être intégrés synthétiquement comme le sanctuaire, la route et la centuriation. Sa théorie est très rare au Japon et ressemble vraiment à celle de M. Pérez. M. Iinuma révèle qu'il y a également la rectitude de l'Antiquité dans la région de Nakatsu et d'Usa.

Cependant, M. Kazuhiro Koyanagi (2018) indique que le Jôri d'Usa a pu être aménagé en utilisant la route officielle en tant qu'axe le plus méridional du Jôri, compte tenu de la présence de la route officielle rectiligne dans la région d'Usa, dont la présence avait été postulée par M. Iinuma (Fig. 10). Cela veut dire que M. Koyanagi signale clairement, lui aussi, que la rectitude de l'Antiquité peut également exister dans la région de Nakatsu et Usa.

Puis, M. Koyanagi suppose comment la route officielle a été construite dans la région d'Usa, en restaurant et en analysant le plan soigneusement recueilli des sublocalités (ko-aza). Selon le plan recueilli de ces toponymes dans le district aux alentours de Usa-ôji

(Fig. 11), M. Koyanagi montre que l'orientation de Usa-ôji est apparemment différente de celle du cadastre qui se trouve au nord de Usa-ôji. C'est à dire que ces deux orientations désignent deux périodes différentes de la formation. Le plan recueilli des sublocalités prouve que Usa-ôji va droit en tranchant le vieux cadastre qui avait déjà été effectué par des pouvoirs indigènes (Fig.12a,b) . Si cela est avéré, il est possible que Usa-ôji dérivant de la route officielle fut construit par un pouvoir autrement plus puissant que celui qui avait déjà aménagé l'ancien cadastre. Nous pourrions considérer que c'était le pouvoir suprême d'alors, ou l'empereur (Tenno).

Examinons plus précisément la période formative de la route officielle (kandô), Usa-ôji et Nishi-sandô. C'est, semble-t-il, avant l'année 738 (Tempyo,10) que le temple bouddhique Miroku-ji fut édifié dans le territoire du Sanctuaire d'Usa, parce que l'orientation du Miroku-ji est réglementé par celle du Nishi-sandô. Cela signifie que la route officielle (kandô), Usa-ôji et Nishi-sandô étaient déjà aménagés avant la construction du Miroku-ji. Par conséquent au Japon également, on pourrait conjecturer la période formative du sanctuaire (Miroku-ji et Sanctuaire d'Usa) par l'intermédiaire de la rectitude et de l'orientation de la route (Usa-ôji, Nishi-sandô et kando) et du cadastre (Jôri de Nakatsu et Usa).

## Conclusion

Dans ce colloque, nous confirmons que M. Pérez avait conjecturé la période formative du sanctuaire provincial par l'intermédiaire de la rectitude et de l'orientation de la route et du cadastre. Et ensuite nous envisageons les recherches que M. Iinuma et M. Koyanagi avaient faites au point de vue synthétique à propos du sanctuaire, de la route et du cadastre dans la région de Nakatsu et Usa. Le résultat est que nous pouvons conjecturer la période formative du sanctuaire par l'intermédiaire de la rectitude et de l'orientation de la route et du cadastre également dans la région sud-ouest du Japon, et qu'il est possible que le pouvoir suprême d'alors ait joué un même rôle décisif en établissant le sanctuaire.

\* Je suis vraiment reconnaissant à M. Antoine Pérez, le Maître de conférences à l'Université Paul Valéry de Montpellier III, de ce qu'il a corrigé ma traduction en français de l'article.

## Bibliographie

- Iinuma (1991) : Kenji Iinuma, Jôri de Shioge et kando, “Usa-ôji”, Comité pédagogique du département d’Oita. (en japonais)
- Koyanagi (2004) : Kazuhiro Koyanagi, Le plan recueilli des sublocalités, “Les châteaux médiévaux d’Oita”, IV (généralités), Comité pédagogique du département d’Oita. (en Japonais)
- Koyanagi (2018) : Kazuhiro Koyanagi, Sur la relation entre la route ancienne et le Jôri d’après Ddes résultats des fouilles à Usa (Japon), “Le sanctuaire, la voie et le cadastre III ”, l’Université de Beppu. (Traduction par H. Yamamoto)
- Gayraud (1981) : Michel Gayraud, Narbonne antique, Paris.
- Pérez (1995) : Antoine Pérez, Les cadastres antiques en Narbonnaise occidentale, Paris.
- Pérez (2016) : Antoine Pérez, La fonction politique et religieuse de la centuriation dans le monde, “Le sanctuaire, la voie et le cadastre”, l’Université de Beppu.
- Rivet (1988) : A. L. F. Rivet, Gallia Narbonensis, London.

モンペリエ第三大学出版助成および  
別府大学学長裁量経費事業

---

発行日	2020年8月31日
発行	別府大学 大分県別府市北石垣82
編集	飯坂 晃治
研究代表	飯沼 賢司
印刷	株式会社クリエイツ. 大分県別府市亀川東町4番20号

